

茶式湖月抄

初篇
上

茶式

422

1

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

明治十年十月補彫

湖月老隱著

茶式湖月抄

京都

同盟書賈藏

茶式湖月抄

目次

南門
號 422
卷 1

茶之原始

初編 四

喫茶大概

八丁

露地大概

十八丁

器物大概

廿三丁

千家系圖

廿八丁

茶之驗效

六丁

草庵茶味

十二丁

草庵大概

廿二丁

交會大概

廿六丁

風爐五德附灰

明治三十六年十月十二日

坪内氏寄贈

透木爐 スキヤブ

薄茶 ウスチャ

花 ハナ

炭寸法 スミ

茶筌 チャセン

筒茶碗 鹽筍 ツ、チャ

藥罐 片口 ヤクワン

爐五徳三ヶ所 ロゴトク

炭 スミ

濃茶 コイチャ

茶巾 チャキン

帛紗 フクサ

大蓋釜 フタガマ

釣瓶水指 ツリビン

大口 オホクチ

平水指 割蓋割盆 ヒラ

長緒茶入 ナガオ

以上初卷目錄以下終卷目

真手桶 マテバケ

曲水指 マカミツサシ

丸卓 マルダマ

四方棚 ヨハウダマ

江岑棚 エジマダマ

袋棚 フクロダマ

三種棚 サンシユダマ

高麗卓 カマリダマ

桑小卓 クワコダマ

紹鷗棚 セウオウダマ

道幸ミチユキ

大板オホイタ

臺子ダイス 爐ロ 風爐フ

四疊半ヨテフハシ 左右

向切ムカフキリ 左右

風爐フ 左右

中置ナカオキ

旅篋タビタシ

長板ナガイタ 爐ロ 風爐フ

大目ダイメ 隅スミ 棚ダ

隅爐スミロ

向板ムカイタ 二ツ置オキ 同 一ツ置

長板ナガイタ 一ツ置オキ 同 二ツ置

竹臺子タケダイス 一ツ置オキ

爐ロ 四疊半ヨテフハシ 流ナガ 鏝カサリ

向切ムカフキリ 逆勝手サカカタテ 流ナガ 点チシ

利休好真臺子リキウヨシマシダイス

桑臺子クワダイス

袋棚フクロダ

利休形角棚リキウカタスミダナ

大板オホイタ 中置ナカオキ

古風点コフウテン

竹臺子タケダイス

紹鷗棚セウオウダ

利休形四方棚リキウカタヨウハダ

丸卓マルツク

桑小卓 クラユツク

三重棚 サンサタ

道幸 ダウコウ

一重棚 イチヂウタナ

利休爐縁 リキウロ

同蓋 ドウガイ

仙叟竹檠 センサウチクケイ

江岑棚 カサシメタナ

利休形旅簞笥 リキウガタタビダンス

大日向二重棚 ダイメヒキニヂウタナ

宗旦板風呂 ソウタンイタ

同覆 ドウフク

利休竹檠 リキウチクケイ

路次之事附數寄屋水屋 ロジノコトトモスケヤミヅヤ

晝茶湯 ヒルチャウ

曉茶湯夜込トモ云 アサチャウヤコトモイハク

飯後菓子茶湯トモ云 イヒゴクワシチャウトモイハク

一客 イチキヤク

耳附茶入 ミミツケチャイル

夜咄 ヨハズ

朝茶湯 アサチャウ

跡見 アトミ

四ツ組茶入 ヨツクミチャイル

手瓶 釣附 水滴 油滴

目次終

茶原始



上古茶といふもの三種は漢土の書小見えり其中の
 苦茶といふもの今茶なりと其餘の二種は蕪穢乃草
 一は堪て食品小は一説は古其菜と食せば故に
 茶の字立はもいなり詩經に語小も出又爾雅に茶と櫟
 と出は是と飲とさるるは漢土小ても中古よりは事
 らへ漢の代は司馬相如楊雄等茶の名はとも精

茶式胡月抄上

細サイなること、聞キコえむ三國サンゴクの時代ジダイ吳ゴ韋イ曜ヤウ茶チャと好コト孫ソン皓カウ茶チャと
 酒サカベに代カヘて賜タマヒふこと、晋シン王ワウ濛モウ人イダ至イタまば茶チャと飲ノミむ故コト事ジ
 頃キョウより漸ヤ行オシナるごとく、其シ後ノチ唐タウの玄ゲン
 宗サウ天テン寶ホウ年ネン中チュウ茶チャ仙セン陸リク羽ウ世ヨは出イデ肅シク宗ソウ代ダイ宗ソウは間ケン朝テウ野ヤ
 交キヤウりて茶チャ經キヤウと著アスし烹ハウ點テンは法ハフ則ソクと立タテ器ウツバと製セイし水スイ味ミ
 と論ロンぜり、天下テンカの人ニル茶チャ飲インの清セイ雅ヤあるを賞シヤウ習シツせしむを
 且カク風ウリウ流リウ盛サカんむなり宋サウの代ダイに至イタツて、太タイ祖ソ開カイ寶ホウ年ネン中チュウ弥イと

さくふし、丁テイ謂イ蔡サイ襄キョウ大小リウ龍リウ團ダンの製セイ出イデ明ミン朝テウに至イタる
 芽ゲ茶チャを用タシひ團ダン茶チャ廢スダまるとも、其ソノ外ホカ漢カン土トまでの記キ
 すに悉コソクく舉アチ盡ツクし、且カク委クニく辨ベンし、無ム益エキ乃ソト勤ツト
 それを、御イ國クニにて、
 嵯サガ峨テン天ワウ皇キョウの御コウ宇ウ弘コウ仁ニン六リク年ネン四シ月ゲツ近チカ江カ國クニ志シ賀カの宗ソウ福フク
 寺ジに御ミ幸コキし給タマヒひ、次ツイに梵ボン釋シヤク寺ジに鸞ラン與ヨと停トビめらむ時トキ
 大ダイ僧ソウ正セイ永エイ忠チュウ自ジ御ミ茶チャと煮ニて奉ホウまるといふこと、

茶式胡月抄上

同年六月五幾内並近江丹波播磨國等仰せコキナイナ志 アラミタンバハリモノクニトウオホ
茶と植ウセて貢ツギと奉タテマツらるゝル類聚國史ルイジユコクシ帝王部帝王部
小志コウシ弘仁六年コウニニ唐タウの憲宗元和十年ケンソウゲンワ當アタり
遣唐使並僧徒ケンタウシナヒシノウトの往來オウライツチノ毎コらり頃コをキ茶事チャジもカ
らツタヘキタ傳來ツタヘキタ又マタ日吉社記シヤキ曰イハ傳教大師デンギヤウタイシ入ニツ
唐タウの時トキ茶チャ子シと將來モチキタ云イハ傳教デンギヤウ桓武天皇クワンムテンノウ
延曆廿三年エンリヤク遣唐使ケンタウシ屬ツキてツ同廿四年ドウニヤク歸朝キテウせ

らラ傳テ天台テ法フ而歸リ獻ス經論キョウロン佛像ブツゾウとト又マタ茶チャ子シ
傳來デンライ小事コト故記コトツ然シカ弘仁六年コウニニ小コ八十ハチ
余ヨ年前マヘの事コトなりニ嵯峨帝サガテイ梵釋寺ボンシヤクジ進スめ奉タテマツり
此コノ故ユヘりニ叡山エイザン乃種サンブツ産ブツなりニふフなるル權記ゴンキ
曰イハ行成卿チヤウウトク日記ニ長徳元年チヤウトク十月十日シヨウジツ出納スイチウ爲親タメチカ造茶所ツシル
請者ウケ今年コトシ造進御ソウシノ茶料物チャレウ文フと出デるル茶園チャエン大ダイ
内裏ナイリの時トキ主殿寮ヌノモリ東トウよりヨリ拾芥抄シラカイセウ見ミゆユ愚ウ

茶式明用抄上

考カウるル一イチ條ヂウ大宮ダイミヤの西南シウナンなり然シカまバ製作セイサク此コノ頃ゴロ猶ナホ

有アリ一イチとトも宇多ウタ上皇ジヤウタウ御落飾ミラクシキの日ヒ醍醐ダイゴ天皇テンノウ仁和ニニワ

寺ジ一イチ御幸ミユキりりり御茶ミチャの饗宴ケウエンりりりクハ花鳥チヤウ餘ヨ

情ジヤウ若菜ワカナの卷マキり出イダ按アズるル日本ニホン紀略キリヤクの昌泰シヤウタイ二年ニニヤ十

月ツキ上皇ジヤウタウ御落飾ミラクシキ御受戒ミジュエカイ共トモ東寺トウジりりりトモ同ドウ三年サンネン

正月上皇ジヤウタウ朝勤チウキン此日コノヒ菅右相カンウサウと始ハジて陪從バイジヤウ人ヒトの詩賦シヒ

と奉タテマツラりルのたぢノタヂとトとトとトとト野厨ヤチウ無ク酒サケ嚴谷ゲンコク有アル茶チヤ荃セン

尾ビ之ノ下モト遂ニ不ト言レ宗ソウ云ク詩管シカン家ケ文草ブンサウ出イりりりノ此日コノヒ

此御作コノミヤクりりり又高倉院シヤウアン承安五年七月アノト八月改元アノト鳥羽上皇トバノジヤウタウ

六十ロクジュウの御賀ミガの内議サダメ萬事マンジ康和カウワの例レイ准ジュンぜりりり

此下コノシタ煎茶ニル具グと鳥羽トバの寶庫ハウコ尋モトめりりりトバせセなナすスひヒ

りりり紛失フンシツりりり仁和寺ニニワジヤウ彖堂エノダウ藏ゾウりりりニニワと所出トコロイ

りりりキョウクカイ玉海抄タマミりりりサカ盛サカんン行ユクりりり

りりりウ種タネ藝ゲ養ヤシナふフりりりハヤ早ハヤくク絶タスりりりソノノチ其後ソノノチ建ケン

仁寺開山千光國師宋_ニ行_キ是葉上僧正榮西_ニ

建久二年歸朝の時茶子_ヲ持來_リ筑紫背振山_ニ

植_キ背振山筑前福岡城下の_ニ且皇都_ニ持歸_リ梅尾_ニ明_シ

惠上人_ニ贈_ル上人醫師_ニ問_フ茶_ハ眠_ト覺_レ

氣_ト勤學_ハ僧徒_ノ助け

もなり_ニ則梅尾_ニ種_ラ其後宇治_ノ里_ニ

移_リ植_キ土地宜_シ應_ト其製造_モ年_々精_シ

密_ニ類_々上品出來_テ茶道_日

月_々盛人_ニ行_ク東山殿_ニ慈照院足利_ノ御時代_ニ

南都_ニ稱名寺僧珠光始_テ點茶製_シ休禪師_ニ

參問_ハ一休_ニ是_ト證明_シ曰茶_ハ心眼_ト覺_レ大_ニ

吾宗禪定_ハ一助_{ナリ}秘重_ニ宋國_ノ經_ニ

山寺_ニ虛堂禪師_ノ墨跡_ト珠光_ト與_フ是_レ我朝_ノ專_ラ

點茶_ヲ用_フ中真_{ナリ}且源義政公光_ハ數寄_ノ妙術_ニ

心要と賞美のつゞ還俗をせ三條邊の艸庵と構へるを
珠光菴主と書し賜り額と打せし皇朝茶道宗匠
と稱するハ光より始む續ひて能阿弥相阿弥茶事と
巧み紹鷗利休に至る茶道全く大成せり此を
よろしく王公乃貴翫隱逸の清賞とならざる今
玉樓金殿より柴門茅屋にうつるすゞあまを翫び
賞せざるハわづらやうに成ぬ予今此編を選述をるん

至る聊をうゝ點茶の要と志する風流の韻士花雪月
朝暮煎喫の雅玩の備ふるの小書かゝるぬ

○茶驗効

茶の効奏諸書に所出る委く舉盡ししに神農本
經より茶味苦しとと飲ばんとし志と益し眠り
少く身と軽く目と明らふはと上古の薬品を備
へて飲とるをいふ茶經に云茶性至寒最精行儉

徳トク人ニ宜ヨロ若熱渴モシチツカツ凝悶キヤウモン腦痛ノウツウ目澁モクジフ四支煩シツツク煩ワツスレく

百節不舒ヒヤクセツガルノビとろくば四五テウ吸スリせバ醍醐ダイゴ甘露カンロとテ衡ヘキとア杭カウ

之シ本草拾遺シウキよく人真茶シンと飲ノメバよく渴カツと止ト

先食シヨクと消セウ痰タンと除ノゾと睡子ムと少スクナ水道スヰダウと利リ目メと明アキラ

うふイ意思シと益ニ神農食經シンノウシヨクキヤウよく茶茗チキメイ久ヒサく服フク

とろく空ヨロ人ニとろく力有チカラアツて志モロサシと悦ヨロコむトウコウケイ陶弘景云トウコウケイ

茶チハ身ミと輕カロク骨ホネと換カフ昔丹邱子シクワウサンクニ黄山君トモノ古ノ仙人トモノ古ノなり

ふフシを服ホシ以ザウ本草ホニザウよく神農百草シンノウサウと嘗ナえ一日フクヤク小

くドリ七十毒ア遇エふ茶シと得エて是レと解ゲを今人服フクヤク薬ヤク

此チ時トキ茶チと飲ノメざるハ薬氣ヤクキと解ゲせんトと恐オソまマるルなり

蘇東坡ソトウバ曰イハ固コト一日イチニツも茶チふフくクぶブくク毎食マイシヨク後濃茶ゴコキ

くシキ口クハと漱シユげバ煩膩ハンジ既スデ去サリて脾胃ヒシものづク清キヨク

肉ニクハ齒ハ乃間ノヒマよくシ茶チと得エてシよくク消縮セウシュク

覺オホえシ脱ダツ去シ了カガル刺挑シトウと煩ワツスくハ齒シ乃性ノセイ苦ニガキ便ベンなり

茶より益堅密小く毒自ら止む東鑑いづく

建保三年二月將軍家右大臣 實朝公御病惱諸人奔走以て

小葉上僧正千光 國師御加持し伺候は處此事とて本

寺より茶一盞を召進させ且茶徳と舉ぐる書

一卷と添て獻せし將軍家御感悦と云く此一巻に書

ら今に傳はる喫茶養生記なり其序いづく茶を

養生の仙藥なり延齡の妙術なり山谷のまじと生じ

其地神靈より人倫を採る其人長命なり云く

右は外も茶徳と頌する古今に語句枚擧する不暇

いづれ今世上は貴とわく賤とわく朝夕のまじと賞以

る誠と宣はるる

○喫茶大槩

利休キウ壯名サウメウ千與四郎と稱し道陳ミチチンの門弟モンテイなり

鷗時アウの宗匠ソウシヤウとて世に用らるるを以て道陳ミチチンの引合キセなり

茶式綱目

與四郎と鷗の門弟は譲り置きてはなり是は併鷗も陳

も茶友小睦はくろくゆき南坊宗啓始宗慶前座故有る後慶と啓トス

堺南宗寺塔頭集雲庵は僧なり一休は号とくも別

号なり宗啓は待翁の法嗣なり利休の時高山南坊といふ人在り

集雲庵今猶南宗寺は内より堺の市中兵火乃

時南宗寺集雲菴も小焼亡しぬ今は集雲菴は澤

庵和尚の再興なり宗啓は利休の高弟なり利休元

より禪法を参りて露地は法をも會し禪林清規も同

しと諸事とりとづらむるハ勿論なりとを扱此宗

啓と門弟は儲て後みふ清規とたゞし真味を喫著

しと益茶道内外熟せし故に此啓は於て書院臺子

露地草菴も小睦も相傳といふ休の子孫茶を

好む者なりは啓もみちびきたまひしと遺言小も申さ

まじはりの茶人なりき

茶式綱目

二

利休嫡ハ道安少菴を養子ニ休凶事後蒲生氏郷ヲ預
也トモ會津ニ任レ氏郷ハ休ノ門弟タルゆゑニ殊ニ懇
篤ナリシガ慶長寛永年間恩免を蒙リてその
禄を賜フも病身年々ニ參勤心ニ任せざ
ると憚里ありし終ニ采地と辭シて退休を以テ道
安ハ阿波ハ蜂須賀一社ニ移リ阿州ニ移リ同所ニ
卒シ道安ハ休ノ實子ニ宗且ニ四子アリ宗拙宗守ハ

嗣ホシ宗左宗室系ニおシ良休齋宗佐ハ江岑ハ娘
方ハ孫也今ハ左ハ良休ハ甥ナリかくはてニ轉ト來
まり宗室ハ長壽ニ元禄十年ニ在セ今ハ宗
安ハ實子ナリ家傳ニ繼來まりト云ニ宗啓ハ録ニ
曰ク珠光の眞ハ座敷ハ四疊半ニ小板昔室形作
鏡天井鳥ハ子紙乃白張付一間床ナリ
古葉臺子
ナカガシラ長板中板等々茶と點ラる後一尺六寸

茶式月抄上

炉と切て平蜘蛛とつゝ釜とかが多及弟臺子と飾り合々
點茶は紹鷗此古矩を以て四疊半と作り品を略して
張付と壁小く木格子と竹は仕り世人珠光は
眞の座敷に對して紹鷗は草乃座敷といへり古圖
録より鷗は此丈室より専ら袋棚と用らるる釣釜と
鏝小く樂多て維摩は方丈を擬へ其室内唯置一
牀とつゝ問疾品中は趣よきやづもるゝや後年鏝

此間といふと出來て草菴と書院との間の物なりし
も此遺風なり書院鏝は問草菴各意味重く由
緒より作用差配諸具饗應等本意は應むべし就
中書院鏝は問乃格式と草菴と一様をめぐらる
より利休宗啓かへもぐ記されり故に草庵乃一
様左に別章として出れ

○草庵茶味大概

紹鷗セウオウは晩年バンネン利休リキウは茶世チャセは流行リウウウし豊太閤ホウタイカウ寵遇テウブウ他タも
異イうして法眼ホフゲン法印ハフインふもあきまらざるべしと御沙汰ゴサタあり
うども休是レと願カガひ居士号コジカフと望カミし正親町帝持オホキミノチノミチ持チり
勅チヨクと賜タニはり利休宗易居士ソウエキコジと稱ニヤウし草菴サウアンは式シキハ鷗オウ
小談コタンじて草茨サウシは二壘ニライ敷ジキととどえさう鷗オウの山里サンリ二
壘ライも此節コノセツは鷗オウ休侘茶湯キウヂヤウの法ハフと定サダめ臺子ダイス乃本ノホン
規キとやうし用モチふるし等閑ナホザリなるべ凡茶バンチャと喫キツさうと漢マン

土ドうと陸鴻漸リウカウセニン盧玉川ロキョクヘンとくし其人オホ多タしとどども或アルヒハ
摘ツミ或ハ貯アヒ或ハ研スり或ハ製セイ或ハ烹ニ或ハつくる等トウは事コトと
専センら記シし置オケり盧ロ同ドウが七碗シチワン仙靈センレイも通トウざる乃稱レヨウと
ふし丹丘子タンキウシ黄山君クワンサンクン身ミと輕カロ人ホ骨コと換カフる小コおよぶと
いまども未ミだ白露地ハクロヂの無味ムミ喫キツ著チヤクセバ猶ナラ真味シンミといふ
らばそまむくは関セと屋ヤぶりり本モトより叢林サウリンは出デる
趙州テウシウの喫茶キツチャ則ソウとくし果法クワフフウ雲ウンは茶瓢チャハウ開悟カイゴ適飲タクイン

茶式胡月抄上

三

山茶店説話サシサテンセツワ類タゲヒに至イタツて、其録ロクを物多モノくせんば茶三チヤ昧ミは交會カフクイの法ハフと云イフハ有アララば禪林ゼンリン一人イチヒトより三人サンニヒトに至イタツまでと茶喫キツをるとつひ五人ゴヒト是コレと茶と施シくとつひ説等セツトウ少シウしる所ショにあり似ニたり休居士キウコジ以前イゼン書院シヨイン臺子ダイス乃ナラバ式シキ世セは花美クワビとの極キマて真味シンミよ及バぶると休キウ甚シカダかるし世法セイフと踏破フミハ去サツて白露地ハクロヂ歩アホミとおもむけ彼二疊テフは席セキ一把ハバウ庭テイは三千サンゼンと蓋覆ガイフク別ビツは乾坤ケンコンある乃ナラバ一

様サマと云のイハレり天正十九年二月休居士キウコジ横難ワタナシの災ワザレよかき世ヨと辭シは事コトハ世人セニヒト知る所故ユヘ記シルさば一碩イツセキ一様コトは意味イミととも來キてかの露地ロヂの清茶碗セイサワン裡リ後世ゴセイ戒人カイニヒトの口腹クハフといさだよく居士コジ此災コノワザレはらひしるば世ヨみ人のミヒトノちかひ盛人サカヒトなるふまゝ衰オトロふ遠トホざうりて居イ士シは門弟モンテイなり人もちかひて他タは茶人チヤヒトは心ココロとくして休キウは流ナガき一時イツジ絶タスらう宗啓ソウケイひとり心ココロざうりて変シぜむといへども

茶式胡月抄上

茶味は汚し行事と辨へ行脚の心ざし任とて文祿二年
三月廿八日集雲菴と出て其去る処とて休の一流
益絶ぬ此後點茶おとろへ行程は從り公命古田織
部正重幸と撰びなごひ御師範ととる其とき天下
漸平らぐぬと諸は心未穩必も隔意も又多く忝も
此爲御心を用ひはごひ小座敷の茶は事とせ上下左
右のむつとごふとごふとる事と思し召且ハ氏にる人ご

賢愚を知らぬ便とて此本意と命とふく免は
一露地草庵の侘とて心時世は真に應とると言
せむく休居士は時に亂世素朴の心むさ少く草庵は侘
面ご思し既治世はわたり誰をも世乃快樂
まなり易しゆべき食しゆふ衣も侘の真と好
ゆべ故は大小はぐひ露地は要路とる小座敷とて古
織は後小堀遠江守正一とて古織は等しく御師

茶式胡月少上

範ハンヲ稱レヨウセル此マ時マ方マ又マ四シの海ウミ浪ナミ音ネハハ武ブ門モンの威イ勢セイ古コ
今イマ又マ超テウ越エツ一イツとトババ人ヒトの心ココロも弥イマフツリク風フウ流リウ事コトに長チカトトぬる
此コノ公コウ命メイハハかカくクはハどドくクなナまマいイ鹿シカ苦ク茗メイはハ侘ワビとト
の取トリ用ヨウふフ及ヨクかカぶブけケりリ思オモふフ古コ織オリ小セウ遠エンも休ユイ乃ニ清セイ
風フウと背ソムくク小コつツべベ休ユイの茶チャ境カイ界カイも武ブ門モンも有アて兼カネ用ヨウふフ
根ネ本ポンとトなナりリしシるル類ルイなりナリ忝カニヂチくクも此コノ兩リウ士シとトえエしシせ
はハまマふフはハらラぶブがガら茶チャ道ダウハハ手テ練レンとト以モチて用ヨウひヒまマふフはハらラぶブ

諸シヨ人ニンハハ師シとト和ワ融ユウハハ導ドウとトわワらラぶブ才サイ力リキョクを考カウへヘばバも
事コトなりナリと古コ老ロウハハ物モノ語ゴ感カン伏フクハハ古コ織オリ歡カン録ロクハハ老ロウ人ニン土ツチ屋ヤ
宗ソウ俊シュンとトつツとトの越エツ州シュウ大ダイ野ヤ道ダウ可カハハ學ガクび書シヨ院イン臺ダイ子ス草サウ
菴アンも小コ一イツ流リウと極キョクとト今イマ其シ流リウと考カウるル上カミ休キウの正セイ派ハ
下シモ土ツチ屋ヤも及ヨクとトつツとト土ツチ屋ヤ古コ織オリハハ属ゾクとト且タニ夕セキハハ茶チャ友ユウ之シ
古コ織オリも土ツチ屋ヤが寸スン志シハハ依ヨウて道ダウ可カと招マコヒて誓チカ古コつツとト臺ダイ
子ス等トウ休ユイより相サウ傳デン習シユひヒらラぶブはハらラぶブも休ユイハハ

茶式月抄上

門下たるふよりそキタ休レの所作シヨサと見覺ミへ其レのレとまゝレふ
事コト言ハふ及レび彼レ土屋長壽チヤウジュと晩年バンネン紫陽シヤウヤウは在アり
是レは學マナびて一流イチリウを究キウむ者モノ二三輩ニサイハイ今イマに在アり織オリの力チカラ
量リキヤウハ土屋ツチヤより知シラふ常ツネニに語カタるは是レは又マタ京師ケイシ橘屋宗チキヤウソウ
玄ゲンとて小遠セウエン怨意オンイは者モノにレをレ覺オホ書ガキは曰イハく利休リキウ
風フウと小遠セウエン風カウフウと各別カクベツなぐりて世ヨに人ヒト申マウし事コトを其由ヨリ
問トヒはるべ小遠セウエン曰イハく利休リキウハ日本ニッポン茶湯チャウの元祖ゲンソと後世コウセ

小コ至シるやぐ茶湯チャウとそく人ヒト利休リキウ流リウは外カ不可レ有ル若ニシくは
必カナラ悪アクるべきぞ其故ソノユはとそ利休リキウの妙ミウ様の物モノまで大禪師ダイゼンシ
達タチは書跡シヨセキ小コもかゝるべ賞翫シヤウケンとそかくまをレ但タ諸具シヨグ乃ニ
取トリ捌サハキ少シく違事タカフはとそとて四隅ヨスミの柱ハシラはかゝる
祢ネも其間コトに窓マド小コも壁カベ小コも戸口トグチ小コもとるたぐひ此茶チの
道ミチはかゝるべ諸道シヨダウとそ然シカと利休リキウ茶チは於オキて時トキを以ユキて機キ
と得エる人ヒトもそ茶チは茶チとそ清風セイフウと境界キヤウガイとそ心ココロ乃ニ

茶式月抄上

十六

取行リオホナつまひなをく我等ワレラぶとさけ及オホぶべまらうウ古
織オリや吾等ワレラハ武門ブモンの身ミをもと
台命タイメイハ應オウぶウ只タ平ヘイ
天下テカハ諸人シヨニン上下サユウ左右サユウハ座敷ザシキの膝ヒザをつツ糸イトをウ
相交アヒる導ミチビととの心ココロふ侍ハベと露地ロヂ敷シキ寄屋キヤの大躰タイテ
とかり用モチヒふるまをては事コトなり自己ジコハ茶湯チャユハ利休風リキウフウを
仕度シタハおもひども夫ソノ人ヒトハ見ミとらめウ他タハ指南シナンと我カ
茶湯チャユと別ベツノ事コトとまるもどつハツカ思シふゆユも

心ココロハ任ニカせウのあまマと以モて休キヨの風フウハ違チガハ人ヒトハわウあマと覺カク
悟ゴみウまウなりと語カタリまウしウ記シルせウかクはウ事コトを考カガ
まウバ小遠コトウも清風セイフウとまウ事コト分明フンメイなり武門ブモンハ有アて
民タミとたウるは要ヨウと勤カン弁ベンハ自ジ此コノ樂ラクと娛ウタとせウ時トキ
かの親交シニウハ為ナハ珠光シユクワウ眞シンの座敷ザシキ紹鷗セウウの四疊ヨダ半等ハントウと
用ヨウひ一向イコウの草庵サウアンハやウ諸具シヨグ饗應ケウオウも分ブンハ應オウト執トリ
行オウチひ唯人タミハ盛事セイジと示シメさウ計ケイる又露地ロヂ草庵サウアンハ一風イツフウハ

茶式明月抄上

二

世間法をまらへども内外清淨の本旨と卓立して休居
士は志し後世及ぶべし古織小遠時に心を用る耳あて
法とはまじくふせざるも咎むべきにあらざれば後代の
歎息なきにたしむるす

○露地大概

露地ハ草菴寂莫は境とまじく名なり法華譬喩
品の説は既に三界の火宅と出で露地は座とまじく思ふ

又露地は白平といひ白露地とも云り世間乃塵勞
垢染ともまじく一心清淨の無一物底とまじく思ふ
白露地といふ外相ハ樹石天然は一庭なり一鳥不啼
雲埋老樹はまじく佳境なりまじく市中宅邊も自
然に地形勝槩すれなる故は木と栽竹とまじく朝
夕露そめく月雪は歩く深くぬ庭は内もおのづから芳
野がづまの奥とまじく来る人も厭ては花るに

茶式月抄上

下

林と愛し心ある友と待て、雪は砌とともらふふど其風
 真まましく述盡し、ぐじ集雲菴は露地松下堂と云閑
 心と待合せ、用ひて一枝は看板と掛る其文如左、
 一賓客腰掛よ来て同道は人相搦り、版と打く葉
 肉と可報

一子水乃幸専ら心頭とまきごとく、きけ通は要と
 一店主出清し、客庵よ入るべし菴主貧小く葉

飯は諸具不偶美味も又ふし、露地乃樹石天然に
 報其心と不得輩、はきより遠く、飯り去なり
 一沸湯松風よ及び鐘声至る、客再来湯相火相に
 羨とあつたしく多罪

一庵内店外は、おほく世事は雑話古来禁之
 一賓主歴然の會巧言令色入庵くべ
 一會始終二時よこさべし、は法活清淡の時くべ

茶三洲用抄上

十カ

制外セイグワイ

天正十二年九月上己

南坊左判

右七條ハ茶會サケハイハ夫法キツサなり喫茶トモカラ乃輩ユルキ不可忽老之

宗易左判

露地門頭ロヂモン小コ斯カのぶブく開示カイシ一奇キ欣然キンゼンとて大道
小踏コタウ著ナラせし先人サキニとあり二師ニシ深切シンセツ茶チより人ヒト千載センザイ乃
下シタに至イマるやで誰タレうらやむ慎ツシミまごむ千變センベン万化マンカ六ムとく

く此七條コナナより録中ロクチュウ休居士キウコジの詠エイ

露地ロヂとて浮世ウキヨの外ソトの道ミチなる小

あらしは麓ノボとあざらしの庵イハ

○草庵サウアン大槩ダイガイ

釋氏シヤクシ要覽ヨウラン曰イハく草サウと以ヨリて座ザとおろふ是コトと庵アンといふと
録ロク曰イハく書院シヨイン臺子ダイスハ式シキハ世間法セケンホウなり壁言タトヘハ文字モンジハ真マコト乃
ぶと規矩キクよりつづくは一端ツタンなり露地ロヂ草庵サウアンと出世シツトヒ

茶三洲用抄上

十カ

間の法ハフふしてたるとハ文字モンジは草サウ乃ノびとト自由ジユウ天然テンゼンの
 妙ミウ一ツぢりリ云ク維摩ユイモは心シン浄キヤウ則チ佛土ブツド浄キヤウ又大タイ隱インハ市朝シチウ
 まマかカくクともトモのノ城邑ジヤウユウ山谷サンコウ其地ソノチとトるルぶブくク窓庇マドヒサシ
 けケ何ナニもモれレ柱ハシラ乃ノよりヨリぢヂりリとトババ恥ハジべベうウババ只シ心シン地チはハ平ヘイ
 坦タンをヲあアべベいイらラなるル大人ダイジン貴客キカクもモ此院ココノイニ入イりリハハ世セ
 路ロはハ花美クワビとト忘ワスまマ蘆網アシアヲとト踏破フミハしてシテ雲外ウンガイのノ賓客ヒンカクとト成ナル
 匹夫ヒツフもモ爰コゝ腰コシとト折カムレとトゆユらラばバ休キウのノ詠ユイよヨ

中落ロク地チ救キウ奇キやヤ寄キりリのノいイらラぬヌおオ茶チヤ少シヤウもモにニ

凡ソ數ス寄キ屋ヤ數ス寄キ道具ドウグもモふフしシ其本モトとト考カウふフ數ス
 寄キとト好コウ事スとト同ト唱トナへヘ少シくク其心ココロ大オホくク違ヒガハふフ數寄史記スキシキ
 李廣傳リクワウデンにニ李廣考數寄註チユウにニ服虔フクテンがガ曰イハレ作事ナスコト數不偶スズナウ
 又前漢書ゼンカンシヨにニ李廣傳リクワウデンもモ同トくク出イデるル師古シコ曰イハレくク註チユウすス
 隻シキしシ不偶フウ云ク凡ソ數スはハ虚アマるル餘ヨとト奇キとトふフかカらラしシしシ
 物モノはハ相アイらラふフはハいイらラぬヌはハいイらラぬヌはハいイらラぬヌ誠マコト是コト茶チヤのノ湯ユの本體ホンタイもモ

一 人々々々世偶俗伴々々のいふと不好
 不如意と以て樂くは一奇の道人數寄者と稱は
 松檀竹の曲直方圓の任て上下左右偶なる物は
 一奇一屋數寄とは是を稱は器物として古新輕重長
 短廣狹或はかけらと補ひ破らるとははるも角
 小も偶々々々々一奇器物數寄道具とは是を稱
 其作用差排配合とは自然天然の奇偶備

活用一又奇偶一同奇まの偶まの奇環然無端
 至極をいふ筆舌の盡に所ふは好事の字を
 風流物ぞいふごとく事と好心をば露地草庵乃
 趣ま大なる世間けいれいハる物すは者あて
 どのなり物數寄道具者めを覺はて此を茶湯と
 ありて悲しくぬ數寄の二字世塵に埋没してより
 百有餘年

茶式胡月抄上

三十二

○器物大槩

天地兩間ははるもけ皆形器なり大小長短各天然
 有り元よりかざりそ用ゆるべ形よりかゝつゝと
 神といひ理といひ妙といひかの天地は先達てはるの
 してちるもが如きてふの物是なり其理を以てすまは器
 則是は應ト其器を以てままは理則彼は乘はるまおの
 て陰陽動靜事理体用もとゞゞ一元又無邊なるを知

器ハ寄り天地ハ第一ハ大器小ハ寄り上下
 陰陽日月晝夜ハ寄り數寄ハ數寄ハ只去
 来ハ一人ハ此器ハ由テ情欲を恣にせり正ハ戒慎べき
 ちとて其分を安んド一簞一瓢ハ足るを志す身外の
 福をいとなむべし少欲知足ハ本意をよく體得せ
 ざる故ハ一と得まば二と福をいとなむ三とぬ一五とふして
 覺へばちとべ他ハ珍とかどく羨もきとぬいやと

茶式胡月抄上

三十三

心ナリ成ナリりて行ユく目モク前ゼン比ヒ々ト多オホし道具ドウグの新シン古コ價カ
け輕ケイ重ジュウととも目メ利キ者シヤ商シヤウ家カ者シヤ徒トなり只タ茶チみ一
風フウ用モチゆぐ用モチゆぐバと見ミ分ワクるコト是シ芥カイ人ニの目メ利キ
彼カ橋ハシ屋ヤ宗ソウ玄ゲンのノ小セウ遠エン問モン世セ人ニ稱セイしヤにリ利
休キウとも小コ遠エンみスるコト物モノ數ズ寄キよ及オヨブべクそレ故コト
休キウ見ミ立タテ名メイ物ブツあハつテ道ドウ具グ今イマ見ミるコト心ココロ好スし
嫌キヤウひラり小コ遠エン見ミ立タテ名メイとツもハりテ諸シヨ家カへハり

まタるコト道ドウ具グつラるコト少オウしテのノ人ニ是シとスるコト小コも嫌キヤウふル
一ヒトもなラくコト好コトむ所なり然シカまバ休キウはハるコト
物モノむスるコト譽ホメらルるコトあハるコト稱セイさルるコトやラれバ
小コ遠エン是シつラるコト曰イハるコト左サ様ヤマはハ我ワレ等ラがハ仕シ合カ
なラれバ夫フ道ドウはハ人ニ説セツなり利リ休キウハ我ワレ一ヒト風
面オモ白シロくハりテ土カハ器シヤはハ風フウなるコト物モノ小コても茶チは出デ
或アルハ名ナと附ツきテせラるコト其シ時ジ代ダイのノ今イマは

本武州月山

三十四

至^{イタ}至^{イタ}も世^{ヨラフギ}継^{シヨウ}賞^ク翫^クらひひくも休^{キウ}の茶^チの大^{ダイ}徳^{トク}ふくも
道^{ダウ}具^グ新^{シン}古^コ輕^{ケイ}重^{ジュウ}ふもよむ徳^{トク}は化^カせしきくもりては
是^{コレ}實^{ジツ}は名^{メイ}物^{ブツ}珍^{チン}物^{ブツ}なり我^{ワレ}等^ラとても自^ジ己^コの道^{ダウ}具^グも
一^{イツ}風^{フウ}茶^チは出^デし面^{オモ}白^{シロ}さともあひ心^{ココロ}は任^{マカ}せいらふも人^{ヒト}乃^{ナラ}
好^{コト}むやもて物^{モノ}も賞^{シヨウ}翫^クし置^{オキ}るたぐひは彼^カ大名^{ダイメイ}
小^コ名^ナ各^{オノオノ}我^{ワレ}等^ラよたのて見^ミ立^{タテ}らまよとらふ何^{ナニ}卒^{ソツ}其^キ
主^{ヌシ}み心^{ココロ}小^コもさくひく誰^{タレ}くが目^メ小^コもいふといふぬ様^{サマ}

なまを詮^{セン}議^ギして送^{オウ}るなり諸^{シヨ}人^ニに機^キ嫌^{ゲン}とくくも
ひく心^{ココロ}も茶^チは物^{モノ}ど兒^ニといふはわづらひすも休^{キウ}の高^{カウ}
風^{フウ}はくくへつて天地^{テンチ}懸^{ケン}隔^{カク}ありさみとぞうくと蒼^{ソウ}
らとくよ橘^{キツ}屋^ヤが覺^{オホ}書^ヘは小^コ遠^{エン}はあつて殊^{シユ}勝^{シュウ}く
尤^{モト}勘^{カン}弁^{ベン}なるべし

○交^{カウ}會^{カイ}大^{ダイ}槩^{ガイ}

賓^{ヒン}は主^{シュ}に對^{タイ}し主^{シュ}は賓^{ヒン}に對^{タイ}し人^ニ相^{サウ}我^ガ相^{サウ}ははめは役^{エキ}

茶^チの用^{ヨウ}抄^{セウ}

せし露地は本意とくくは故は事と志るにわたり
志しとるを恥しむ賓相主相相泯し来まば白露地
頭賓主歴然は會也録に曰客亭主互は心にかるふも
よしかふらざるはゆごと云休の金言毎かくはぶと
休の詠よ

茶の湯といふは湯とこそつゝ茶と云々
はむむらりなる本と知る庵一

茶は本意と學ぶ又他事らるる録に曰つる人利
休は茶は秘事ハ何如にと問休答て茶ハ腹によき
中ふたて炭ハ湯のりく中よ置花ハ其花乃よき
やうは活きて夏ハ冬ハわらうふきる此外秘
事ふしとわらる問人不知して其合点の前ふと
いふ休が白くはま合点はまらるはとくし
えの我等門弟子よなるべしといふ其座よ笑嶺

和尚居たまひく休の苔へ至極とる鳥巢は白居易
答て諸悪莫作諸善奉行といふれたどひく三歳
の童も是と知とも八十は茶人も行かす何をもん
挨拶らるる問人感伏きと云く又曰紹鷗利休
は茶の意味ハ

見つるせは心も紅葉もぬるるを浦のゆせは
涙乃夕々しき
定家卿

花とけい結しんふし里乃香同はく満也
まよとせもや
家隆卿

といふ此兩首もよくかろりと常々沈吟せし
ましとるや宗啓は首よ

花のしらとるやもろくも那うつるも
ぬるるえつるせとる地乃夕々しき

○系圖

千利休

初納屋與四郎ト称シテ沙界今市坊ノ人ナリ姓ハ
田中氏其先ハ室町家ニ仕ヘ同朋爲リ名ヲ千阿
弥ト云因テ後千氏ニ改ム抛筌齋利休居士ト号ス嘗テ普通
國師剃髮弟子ト爲ル法諱ヲ受ク茶道ヲ道陳紹鷗ニ居士
温子テ其道ヲ大成ス蓋シ茶道ヲシテ四有ラレム一ニ曰能和シ
二ニ曰能敬シ三ニ曰能清ク四ニ曰能寂茶祖珠光ノ故事ニ因テ亮
所ト云遂ニ茶道ヲ以テ右府信長公ニ仕ヘ後太閤秀吉公ニ仕フ
三千石ヲ領ス命ヲ受テ茶法ヲ改定ス損益補否之精ニ捨之キ
コナレ其法偏ク海内ニ行ル列國ノ諸侯ニ重シセラセク百世ノ宗
師ト称ス天正十九年辛卯二月廿八日没七十四歳紫野聚光院ニ葬ル

道安

初名紹安不休齋眠翁病有故ニ家ヲ不繼
嫡男ナレハ利休ニ先ダツテ死ス天正十五年七月朔日

千家表

宗淳

少庵ト号ス宗易第三子也兄道安病有ヲ以テ宗淳
家ヲ續ク慶長十九甲寅九月七日没ス

女子名

女子名モズ

宗旦

元伯ト号シ又元叔ト号シ今日庵咄齋ト称ス宗淳ノ男
幼シテ紫野聚光院ニ喝食タリ後豊太閤上意ヲモツテ
千氏家藏ノ具悉ク賜フ後ニ寺ヲ出テ宗淳ノ家ヲ續ク性隱ヲ好ミ
榮利ヲ慕ズ深ク祖父ノ意ヲ得テ其心汲クトシテ已ズ茶事ヲ以テ

茶式朔月抄上

三

己カ任トシ大キニ家聲ヲ振フ万治元戌戌年十二月十九日没ス

女子 早世

山科宗甫 宗且カ弟山科ニ住ス
花亭ト号ス

宗拙 初名ハ宗甫開翁山科ニ住ス後京都ニ住ス
其ヲ宗拙ト云ナリ若死

宗守 千家武者小路 似休齋官休菴一翁開翁
千氏別家上京武者小路小川東ハ所ニ住ス故有テ家ヲ
不繼宗且季子本腹讚州侯ニ勤ル延宝三乙卯年十二月十九日没ス

宗左 逢源齋江岑本家ヲ繼故宗且ノ摠領ト成是ヲ今古宗左云
寛文十三壬子年十月二十七日没ス

宗室 重 仙叟玄室 今日菴ト称ス千氏本家ノ裏ニ住ス宗且隱居處
利休堂アリ元祿十丁丑年正月廿三日没ス

女子 於和喜久田宗利妻俗名雛屋勤兵衛但シ五人ノ内
宗拙宗守一腹宗左宗室於和喜別腹

宗室 二代 不休齋常叟 俗名宗安
松平加賀守ニ勤ル後松平隱岐守ニ仕フ
宝永九年五月十四日没ス

宗安 六開齋泰叟 豫州松山ニ仕フ
享保十一丙午年八月二十八日没ス

宗乾 最ク齋竺叟 俗名政之助實ハ覺ク齋ノ二男宗安
養子ニナル 享保十八癸卯年二月廿五日

三代 宗室

勿、齋 又玄齋一燈梅合堂トモ云
實覺、齋ノ三男實兄江養子ニ成ル
宝曆中没ス

玄室

不見齋石翁ト号ス
享和元年九月廿六日没ス

宗室

認得齋柏叟ト号シ
文政九年七月廿四日没ス

宗玄

石翁ノ第二子次門ヲ起ス

宗什

石翁第三子啜齋
宗守ノ養子トナル

玄室

靈白堂ト号ス

二代 宗佐

隨流齋良休齋ト号ス
實久田宗利男宗且ノ孫也逢源齋養子トナル
元祿四辛未年七月十九日没ス

宗巴

早世

三代 宗左

覺、齋原叟 流芳軒トモ
實久田宗全ノ男ナリ宗利ノ孫也能得祖風之旨
擬宗且一世之名家也
享保十五庚戌年六月二十五日没ス

四代 宗左

如心齋丁、任 初宗員ト云之天然紀州ニ仕ユ
性敏而數奇ノ才秀於衆與弟一灯議定茶道七
事之法、今爲茶家之清賞 寬延四辛未年八月十三日没ス

茶式胡月抄上

宗乾 六閑齋ノ養子

宗室 宗乾ノ養子

^{五代}宗左 啐啄齋件翁 初宗員
文化中ニ没ス

宗左 初宗員了之齋 實久田宗慶男
文政八年八月七日没ス 五十一歳

宗左 汲江齋

^{武者小路三代}宗守 文叔若キ時重治郎一翁ノ男 讃州ニ仕テ
寶永五年至正月廿二日没ス

宗原 早世

^{三代}宗守 靜齋 眞伯文叔ノ男 靜ノ齋
高松少將ニ勤ル 延享二年三月廿八日没ス

^{四代}宗守 直齋ト号ス又堅叟眞伯ノ義子
讃州ニ仕テ

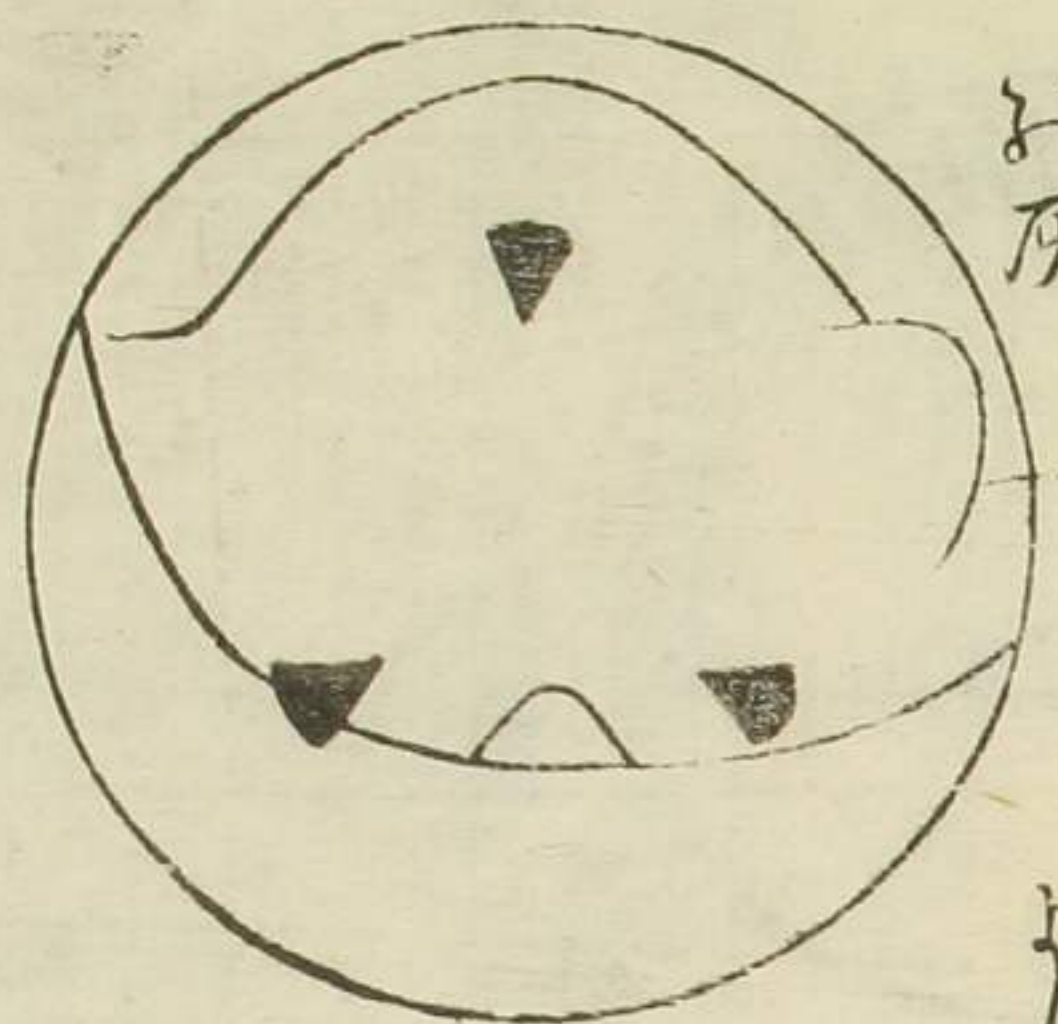
^{五代}宗守 啜齋ト号ス直齋ノ義子
讃州ニ仕テ

^{六代}宗守 好ノ齋ト号ス啜齋ノ義子
讃州ニ仕テ

宗守

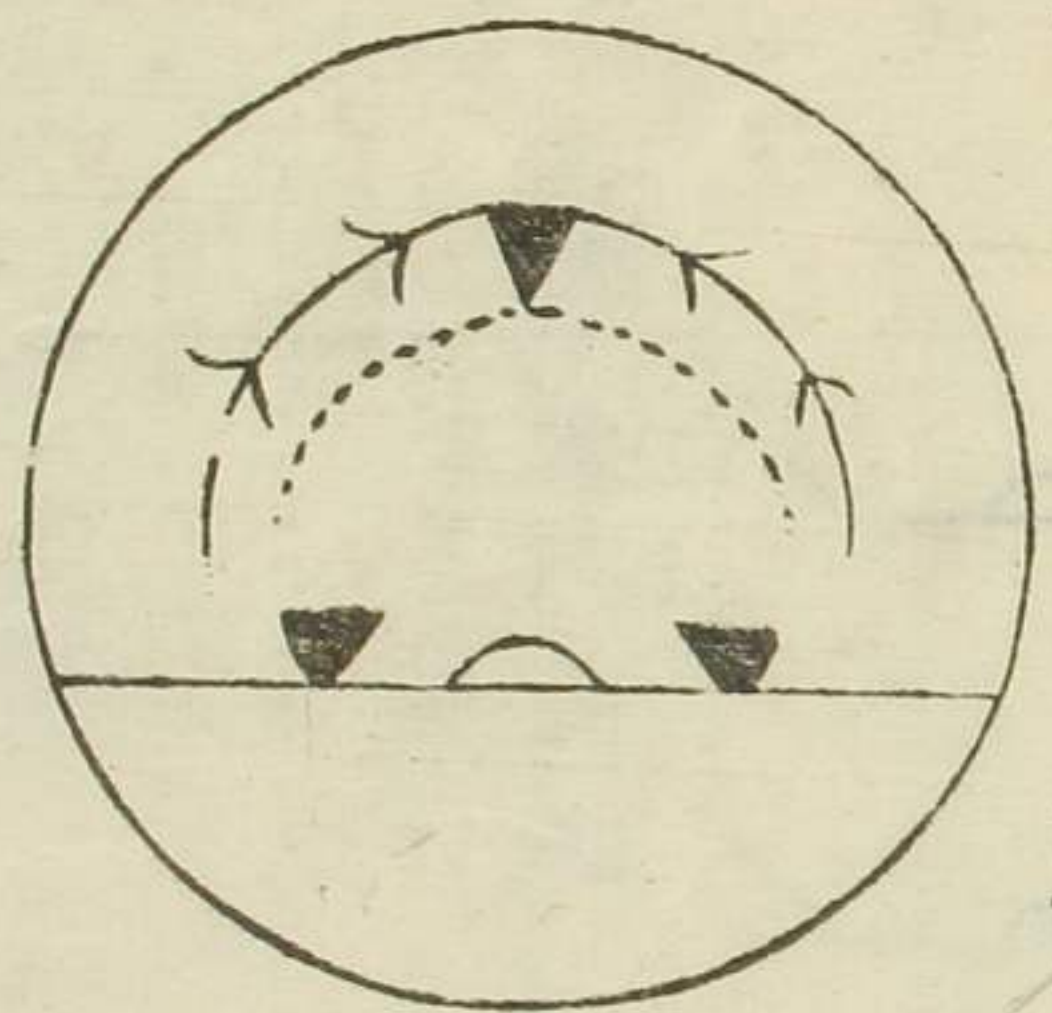
風爐五德附灰

土風爐
此灰

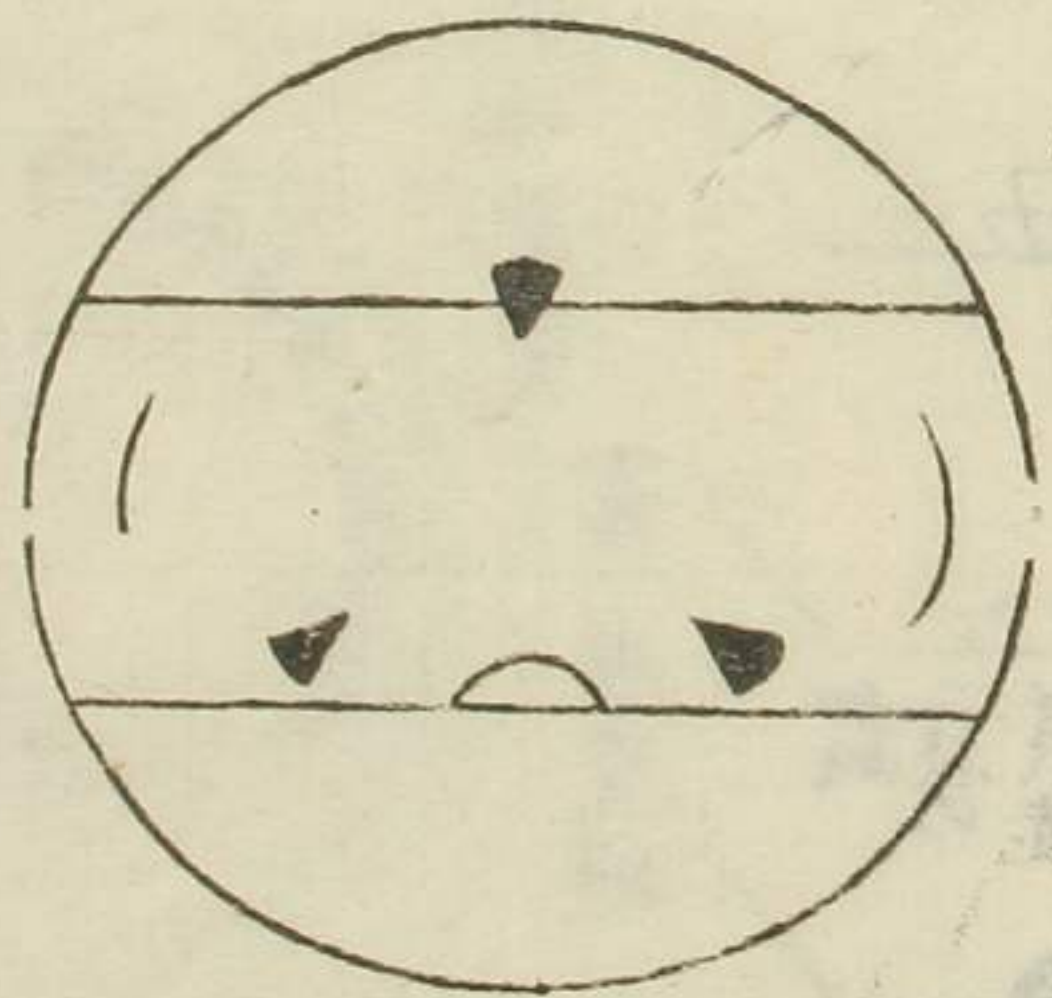


此山のうへ

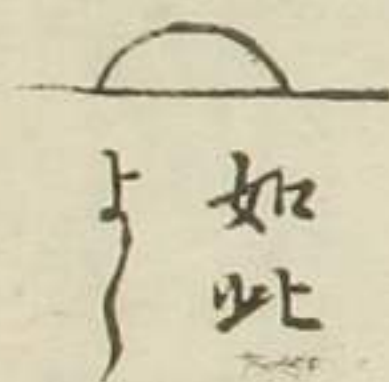
雲龍



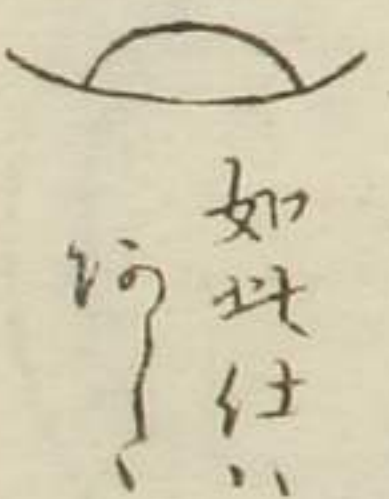
雲龍



右猪子と云は振替り也
中屋一丁と云は長一文字

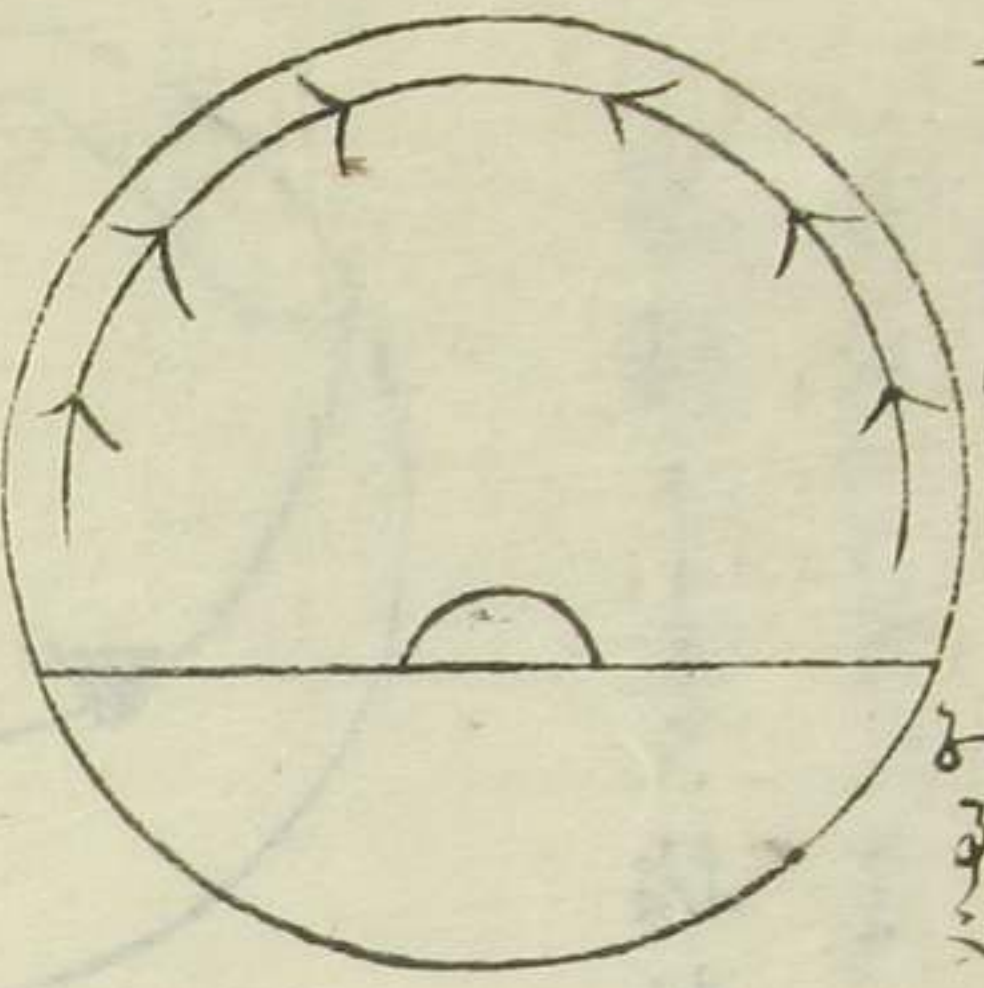


如此

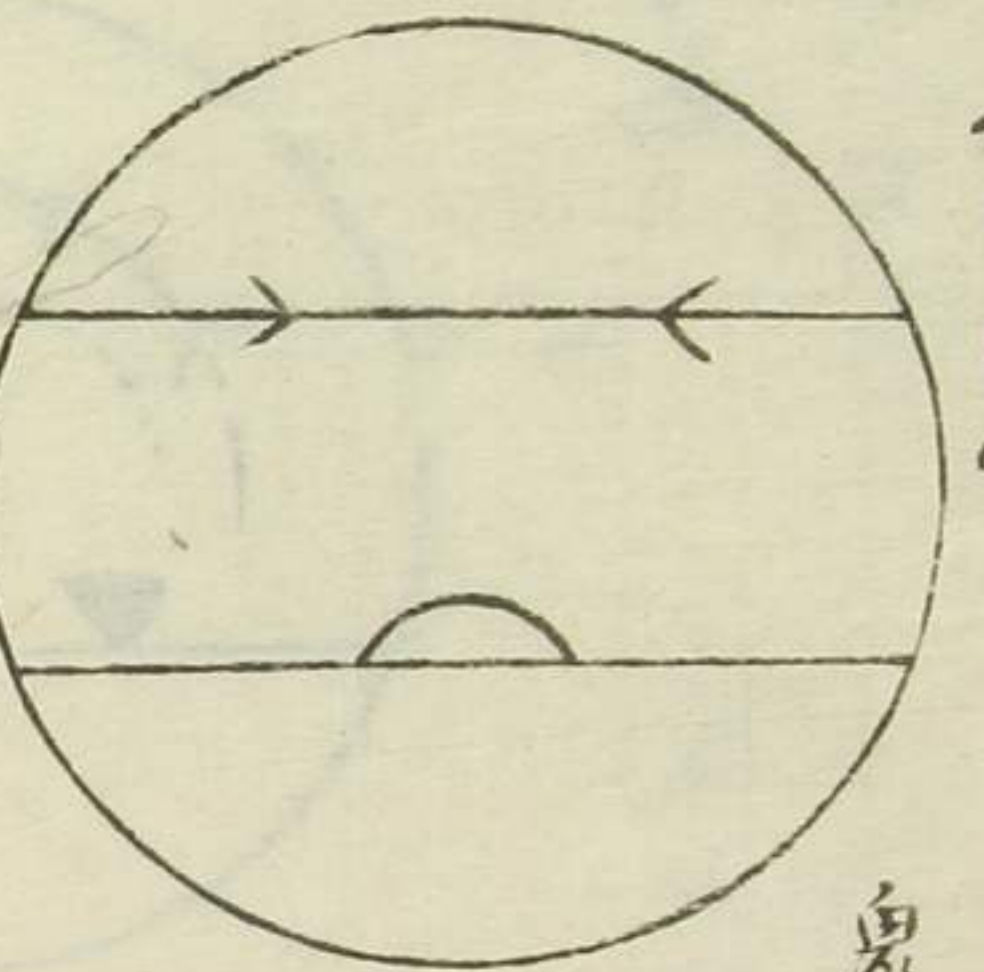


如此仕

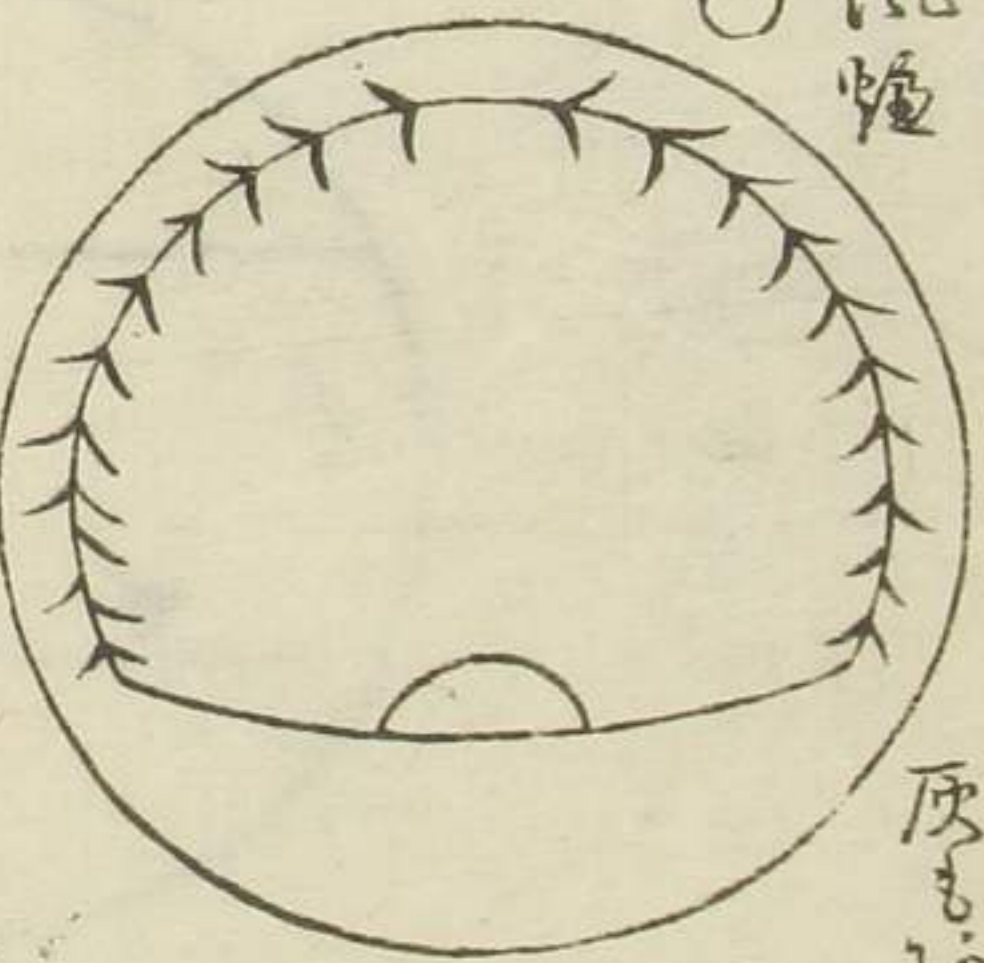
真の風爐 透本風爐



真の風爐

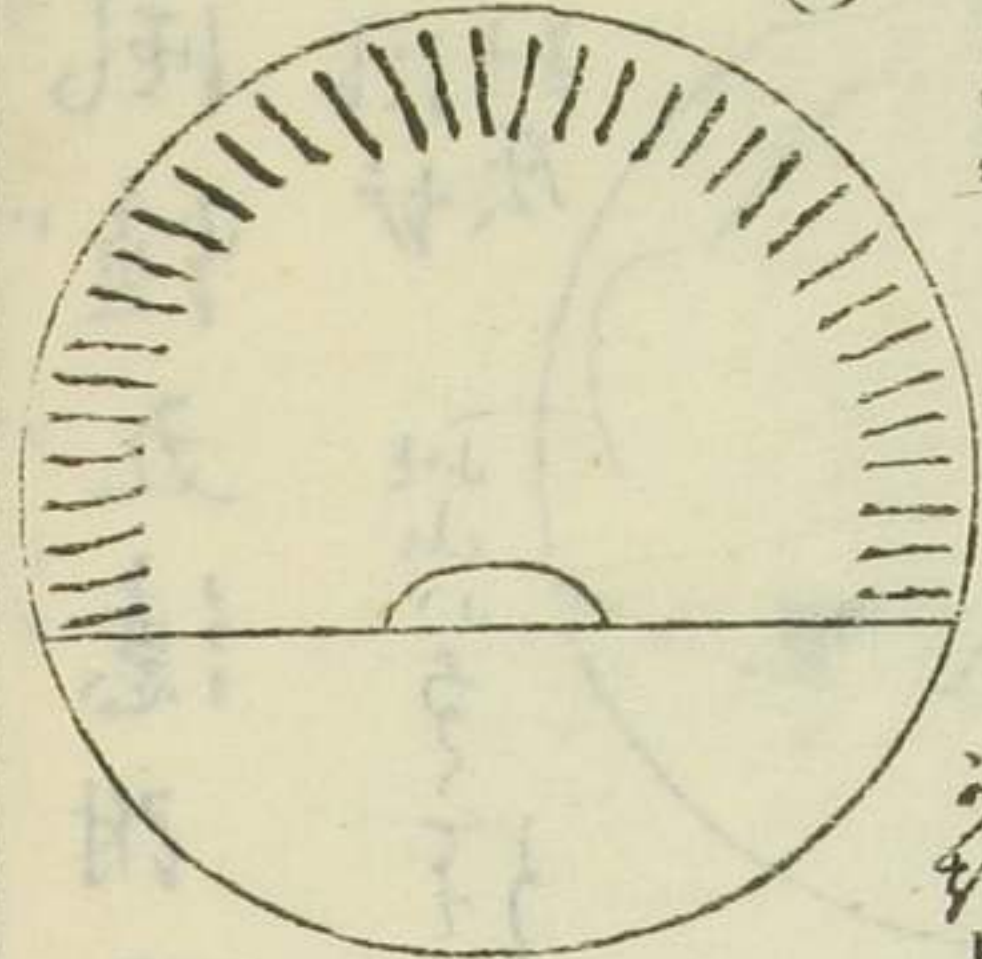


琉球風爐 鬼風爐



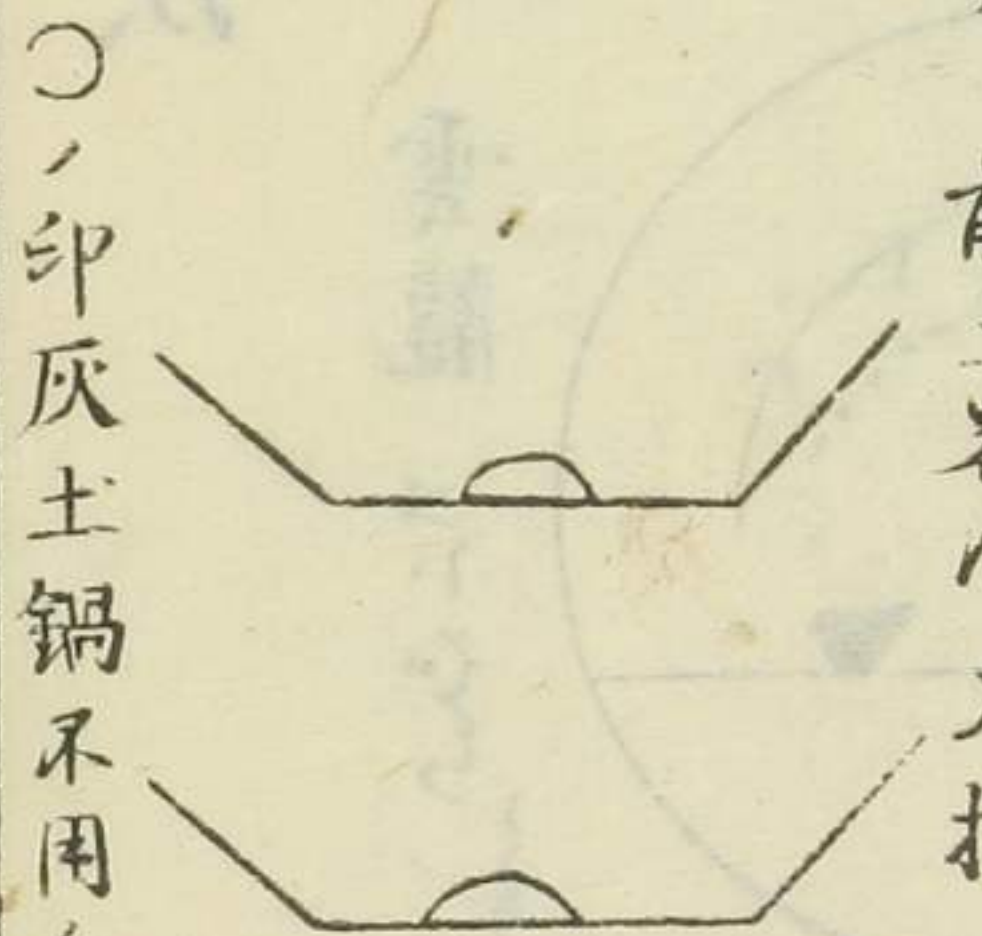
又向一文字付 灰も少

板風爐

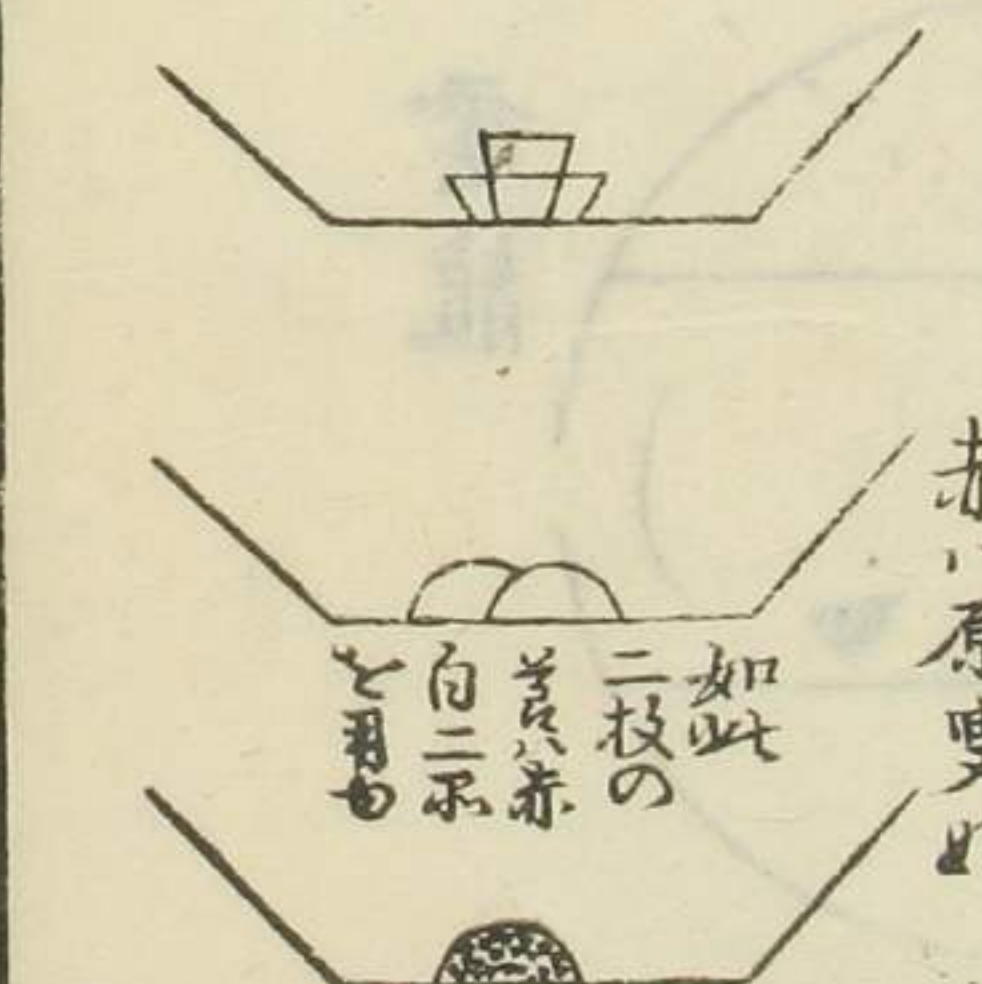


帯付灰乃 上

前土器乃大概



土器白赤二品アリ



赤原豊好

如此 二枚の 差赤 白二品 と用也

○ノ印灰土鍋不用分

一土風爐此類透本風爐小ても皆灰とまろく

○金風爐之灰とまろくハ鳳凰風爐とくわくわく

右風室風爐ハ良休宗佐娘婚ハ言おろく老ハ

後原豊百位乃釜と好む

○西く風爐何釜とも用也丸釜尻をう阿孫陀坐四

方釜は類より

○尻張風爐丸釜風爐道安形右子同ド

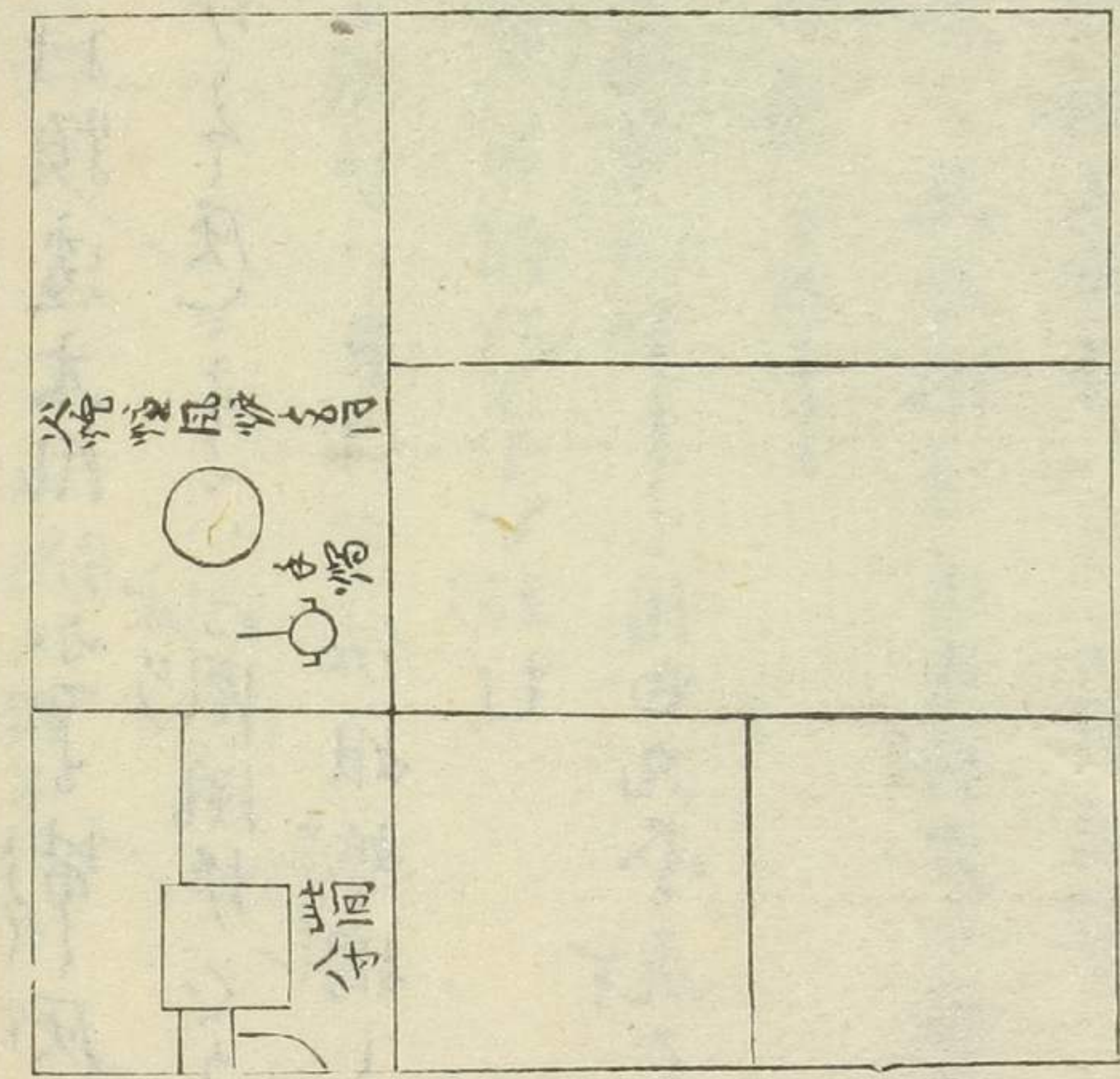
○板風爐杉本地さんふ一宗且好

同桐かき合原豊好

一風爐置所之事

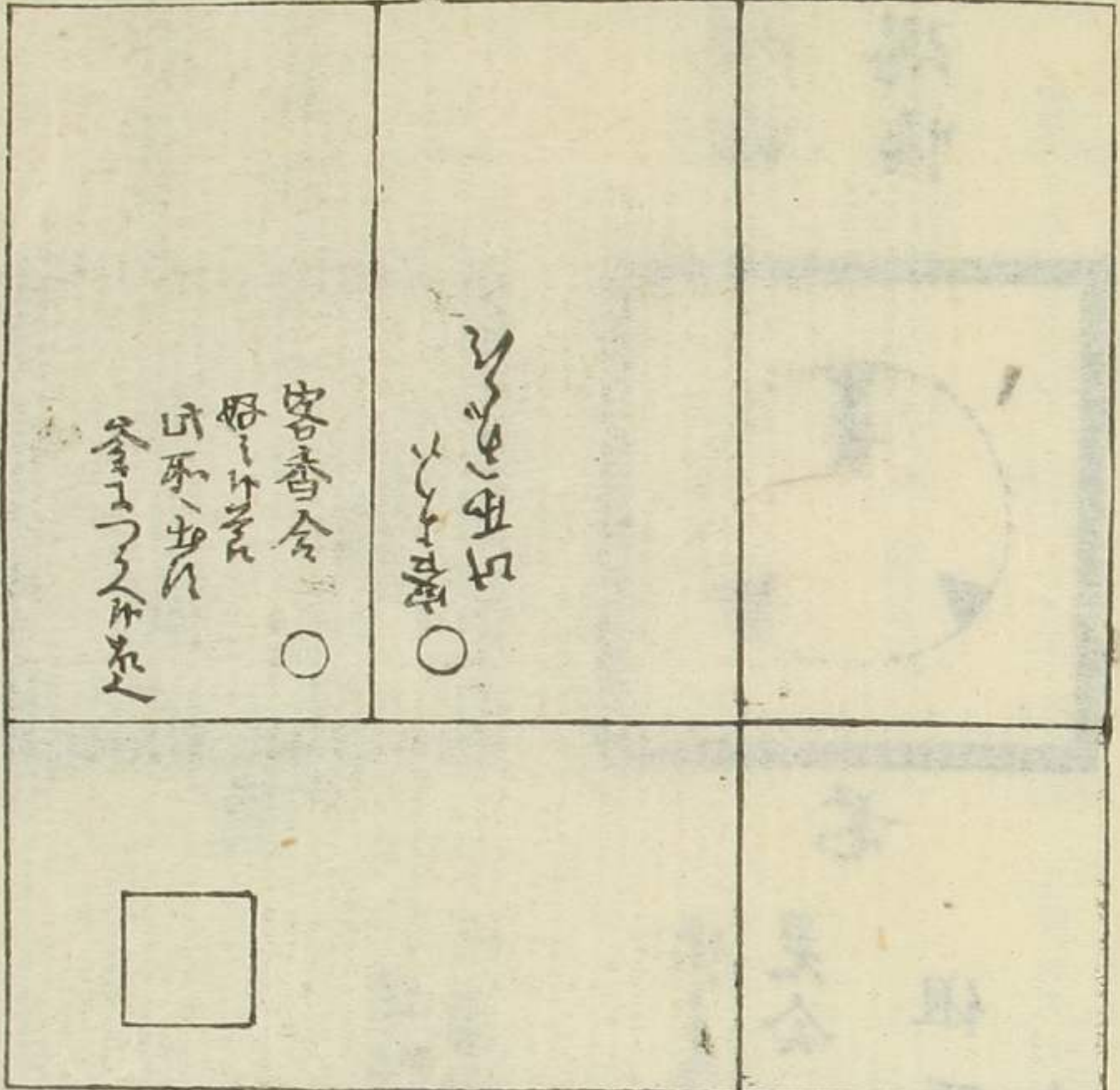
四寸半以上八寸小ても
運び長と所如图

小板と大のり
大風爐小好方
小風爐大好方
天然好樂瓦
土風爐もか
此風爐も同
下より



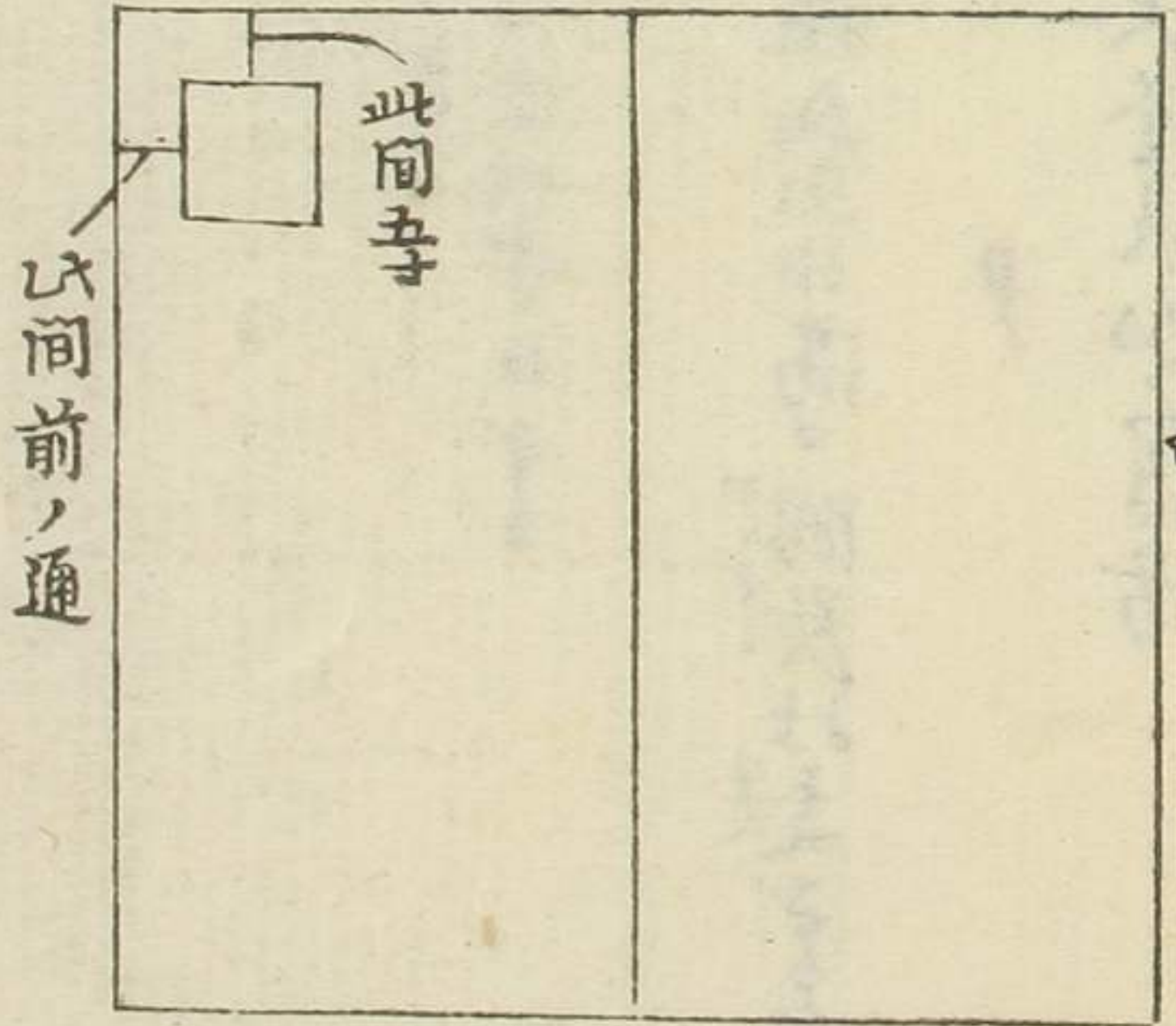
茶道口

如此寸法とく小板大小有
故図總置ゆ
此間用五ツ七ツ九ツ十一
十三ツで貝合
小板半寸中寸より
向ふ二寸出ぬ



茶道口

四寸半風爐は昔尋後拾如圖五寸有リ
上座床下座床の差別あり



小室敷一間う又八寸目
是は所如图

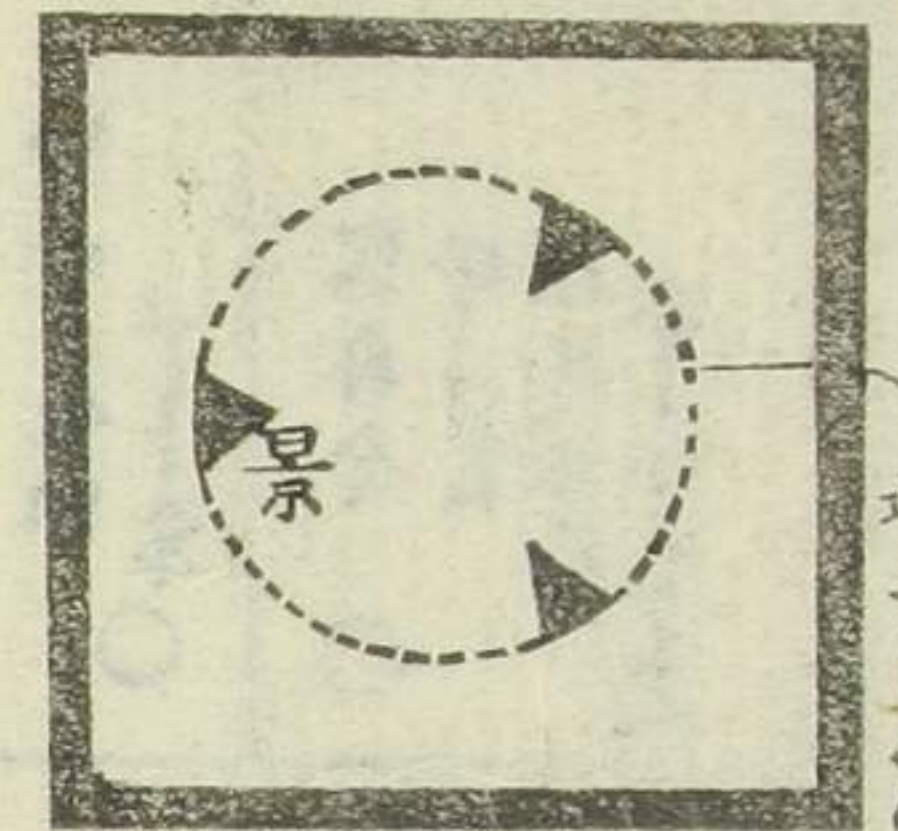
一爐五徳三ヶ所

切大寸法は是れ有

此二ヶ所は方どぐん又付重

四等寸切

大目切

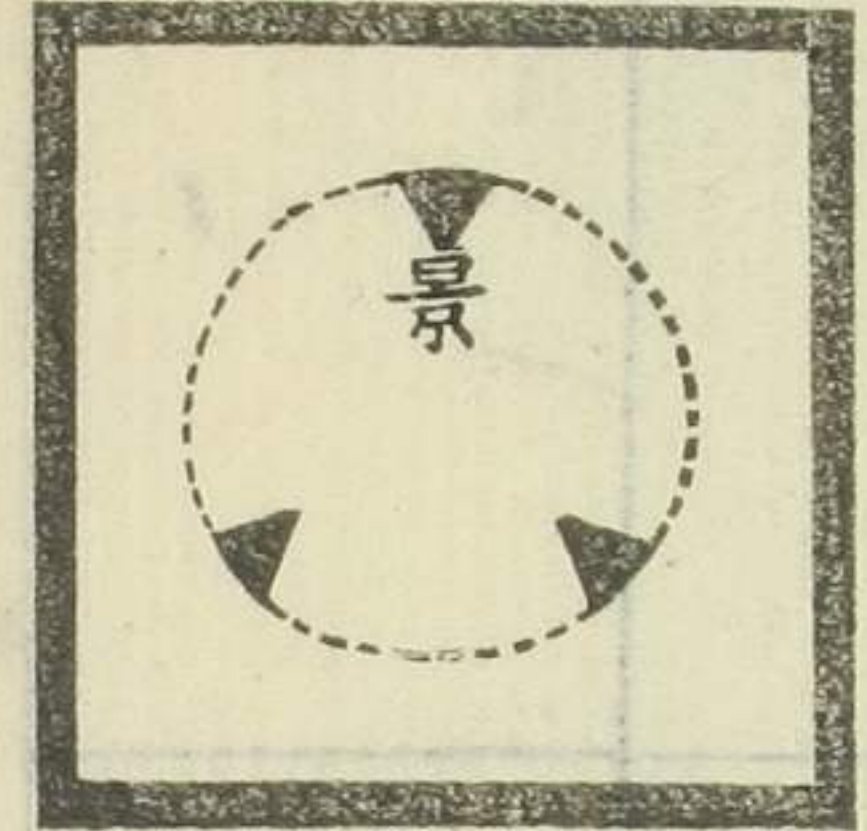


茶

此丸床は方へさる
下座座乃背は右に方にする

向切

隅爐



茶

灰より五徳丸出の高々 隅炭は支ざる中
見合

組灰大釜入の寸方

小釜入の高キ方 口傳

一 惣どろ茶^{ケイ}の丸四等寸大目^ハ床付乃方^ハさる向切
隅爐ハ向^ハさる

一 透木爐

取扱^{アセ}方風爐^フは通左^ハさる

一 透木風爐

常^キの^カさ^カる^カ客^キ附^カ乃^カ方^カより^カ取^カり^カ左^カは^カの
小^コ釜^カを^カ左^カと^カ取^カ重^カの^カ釜^カ乃^カ搦^カは^カ鑿^カとな^カる^カと^カお^カく^カ
置^カと^カ紀^カ々^カ左^カ乃^カ方^カより^カ置^カなり

茶事月抄

茶事箇條

一 薄 葉

一 炭 事

香合ゴスリ炭物スも夏サは差別サバなく用也ムカシ 炭物スを焼物スと用ひ来りしカクの今イマは其カク形カタより差別
なく用也ムカシ如心コシン齊風サイフウ爐ロは昔コト備前ホテノ布袋フタイ乃ナラ香合ゴスリ用ひ
し事コト有ア之シよ

向ムカシ切キは向小板ムカシコイタ乃ナラ真中マナカのノ小コ地チ香合ゴスリ置オケてテよ
但タ約ヨク登ノボるルは不用ムコト

香合ゴスリ灰ハイとト小コ地チせ出デるル事コト、燒物ヤキモノも合ア小コかカざザるル事コト、
灰ハイじジとト地チせセるル、蓋フタも炭物スの真故マコトとト地チせセるルはハ炭物ス香合ゴスリ
てテしシ古コろロ外ソト扱アツひヒふフ

一 釜 水 と 指 事

木キ地チ湯ユ桶ツケは蓋フタを仰オホせセるル上ウヘの釜カマに蓋フタを
取トり茶チャ籠カゴ湯ユ桶ツケは蓋フタを仰オホせセるル上ウヘの釜カマに蓋フタを
棚ナベ物モノは蓋フタを置オケはハけケるル一ヒト用也ムカシ

茶事月抄

三十一

約金つは 鍵不打四尋半自在と用ゆると年五十以上有下ハ
紅板花乃 上英乃四二 鎖廣座敷年仕美別り須と用ゆ小座敷ハ老若

は美別りく自在と用ゆ一向さびる須ハ小座敷
小用ひてもよ

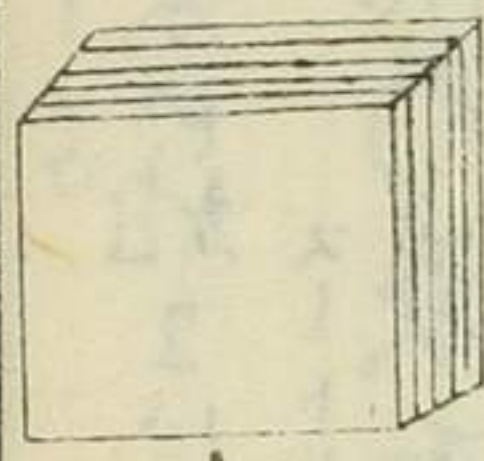
一 灰ボウロク之事

茶ぐらハ風爐と用ゆ又ヤキハ爐と用ゆ

一 釜交紙之事

取扱方口傳

組との釜交紙
少すもしくも
よ



右寸法耳廻り一尺八寸二折成ゆ左通
なら申すもう四寸折方より

耳の組くちさ方
利休
扱ひ本やゆ通

「此方と釜上げざるは乃釜此方へさる

ゆ風呂此心得を扱ひ下

紙不美濃紙又杉糸なら合と宣紙敷二十枚

竹皮釜交好不知

炭け節子燭と出も薄茶茶葉汁言ハ子燭不出

組シ 貴人廣座敷なりとハ子燭出

一 花生搦之事 口傳

尋座ハ薄板と交

組シ 竹花入籠の紙ハ薄板ふ

茶試明抄註

落^{カチ}一懸真中^{カチ}の釘と打^{ウツ}事内利体外宗且

落板利体形 落板板中利体床より事の目

真 シシヤ 真壁^{シシヤ}矢筈^{ヤヅ} 大ナル方上

草 かさ合^セかうたい

行 涌^ユ浪^{ナミ}蛤^{カキ}齒

一花^{クワ}臺^{ダイ}利体形置合

花 花切 水次 甚^シき茶中^{チヤ}乃^ノ大小^{オホコチ}五^イ拵^ケ乃^ノ内用 小乃方上

一垂^{スベ}撥^{バチ}之事

去^キ望^{ボウ}乃^ノ上^ノ張^{ハリ}付^{ツキ}床^{トコ}より事^{コト}不用

一鉤^{ツル}船^{フネ}之事

五^イ寸^サより五^イ寸^サまで四五寸^サより式^{シキ}尺^{シヤク}中^{ナカ}の内^{ウチ}端^ヘと
上^ウ座^ザ一^{ヒト}き

○置^キ筒^{ツツ}乃^ノ内^{ウチ}と梨^{ナシ}地^ヂなごぶ^ゴし^シる^ル花^ハ入^イの^ノ草^{クサ}拵^ケ落^{ラク}
板^{イタ}と交^マてよ

一濃^{コイ}茶^{チヤ}之事

茶^{チヤ}入^イれ^レ甚^シき^キを^ヲお^シら^シる^ル茶^{チヤ}拵^ケも^モ茶^{チヤ}抄^{シウ}の^ノ
茶^{チヤ}付^{ツキ}よ^ヨお^シく

○瓶^{ビン}子^コは^ハ茶^{チヤ}の^ノ大^{オホ}さ^サな^ナら^ラば^バ扱^アふ^フ事^{コト}よ^ヨ口^{クチ}傳^{デン}

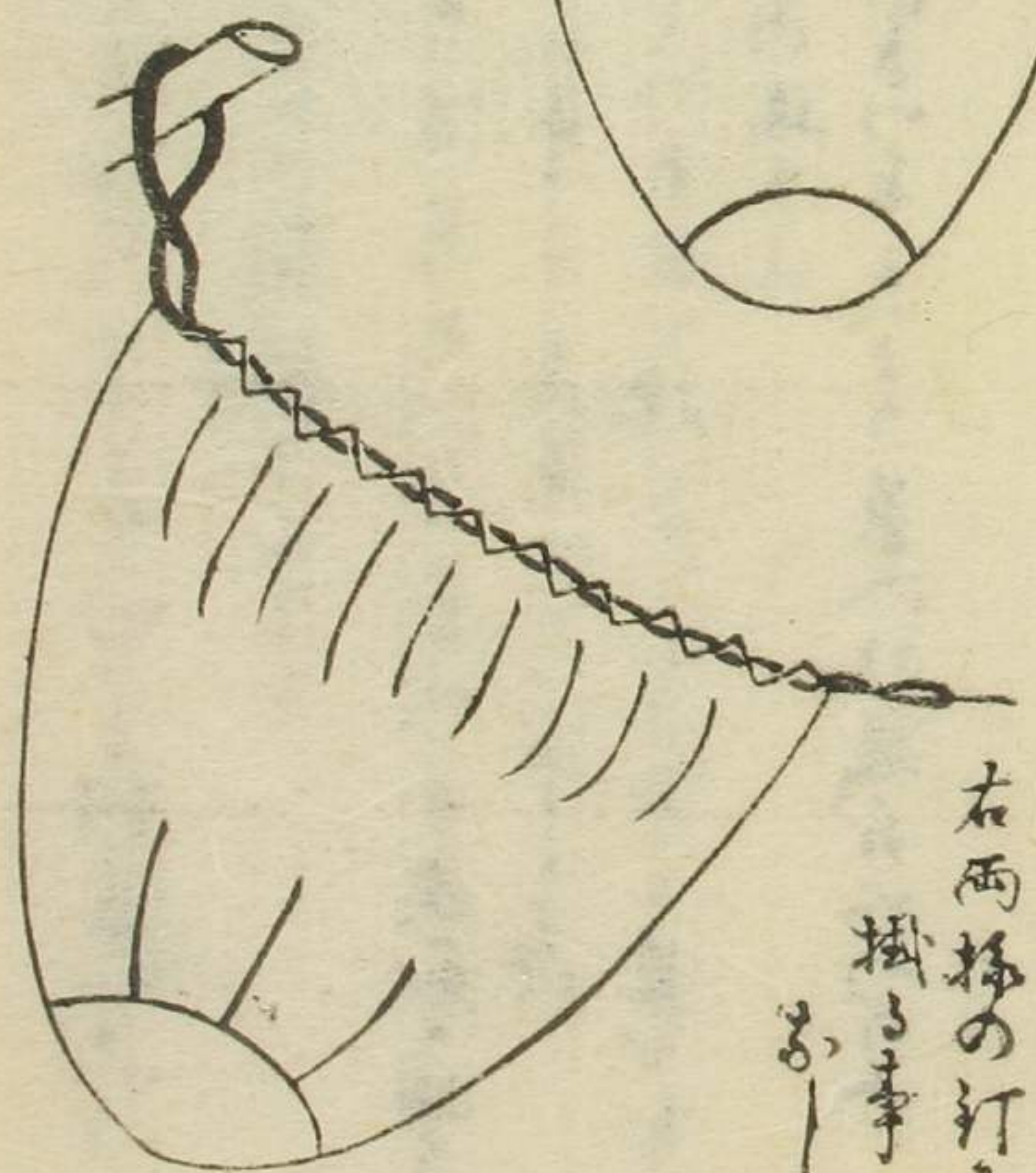
茶試明抄註

四十一

一袋道幸釘掛掛針釘掛やう如图



仲程の掛やう
釘鉄四角頭



長緒は袋
右両杯の釘掛

但し唐物倭物とも尻張に採なる物を用ては
濃茶薄茶茶碗替へて貴茶茶碗を濃茶
点下の茶に替用也
茶入所金、時茶、王左の方一附も出候へば
とこも具も准也
貴茶道具とて此の帛と好む右和布とて此
世の帛と好む也
大海の茶入とも胴とつくたりふれくは口傳
但薄茶小も用也

茶式朝月抄

一 束 帛包 大中小

大ハ帛ニ包事ツムふ一 中ハ下ニ一ツと包ツムふ上
小ハ初より包ツムふ上ニ取扱ツカてよ

○ 束ニ濃茶テと包下テの包ハ後茶葉テ付言・香吹・中次・金輪テニ
焼物テ付用濃茶テ息テハ事ニ濃茶テ息テハ宜テ一ツ

○ 濃茶テニ事取扱テハヤハ茶抄テと持テ茶テと包テ出テ一葉テと包テ
包テ蓋テと仕テ茶葉テ乃茶テの通テ也

○ 茶抄テと包テと仕テ事テ包テと事テより茶テ入テ仕通テハ何テも
右テ也テ也

○ 和巾包テハ和巾テ付テ成テ也テハ茶葉テ入テ仕テ袋テとらと包テ振テ扱テと
包テ一

○ 茶入テ小テハ小テの上テと包テ扱テ事テ何テも事テハ小テの通テ
包テ一

一 老松

ふさ方左テ仕方帛テ望テ一と包テく

常テハ包テく横テ小テ包テと包テ一

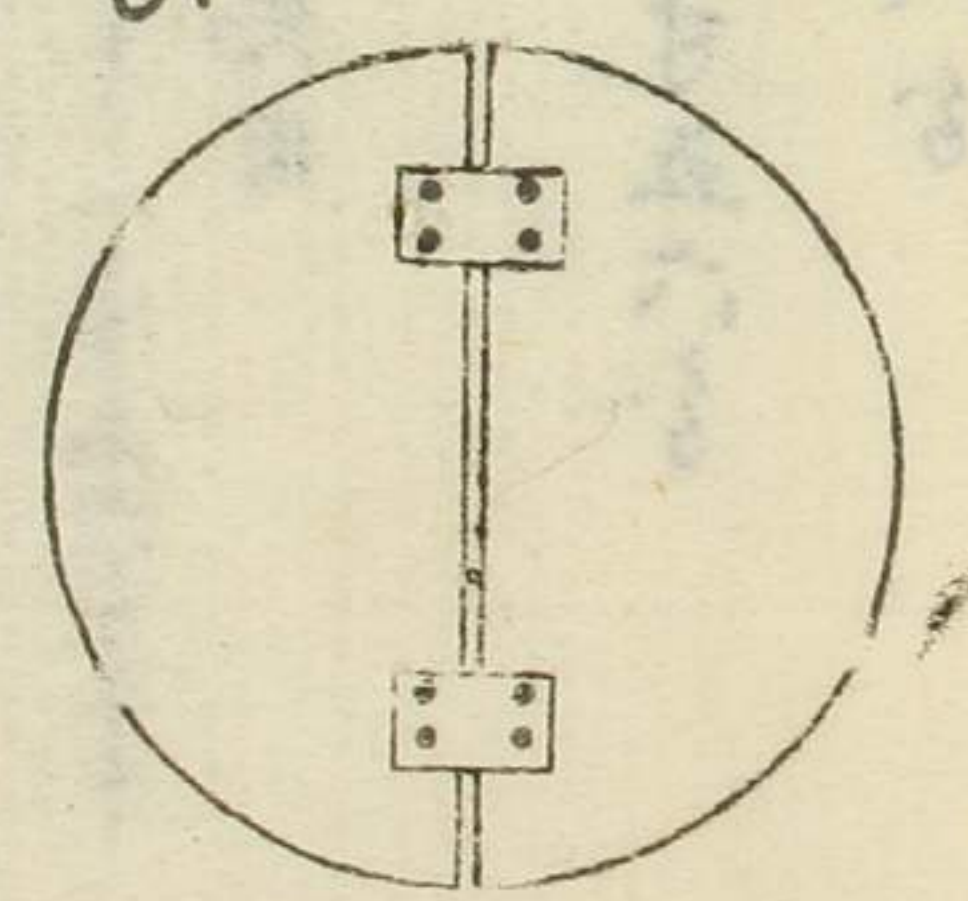
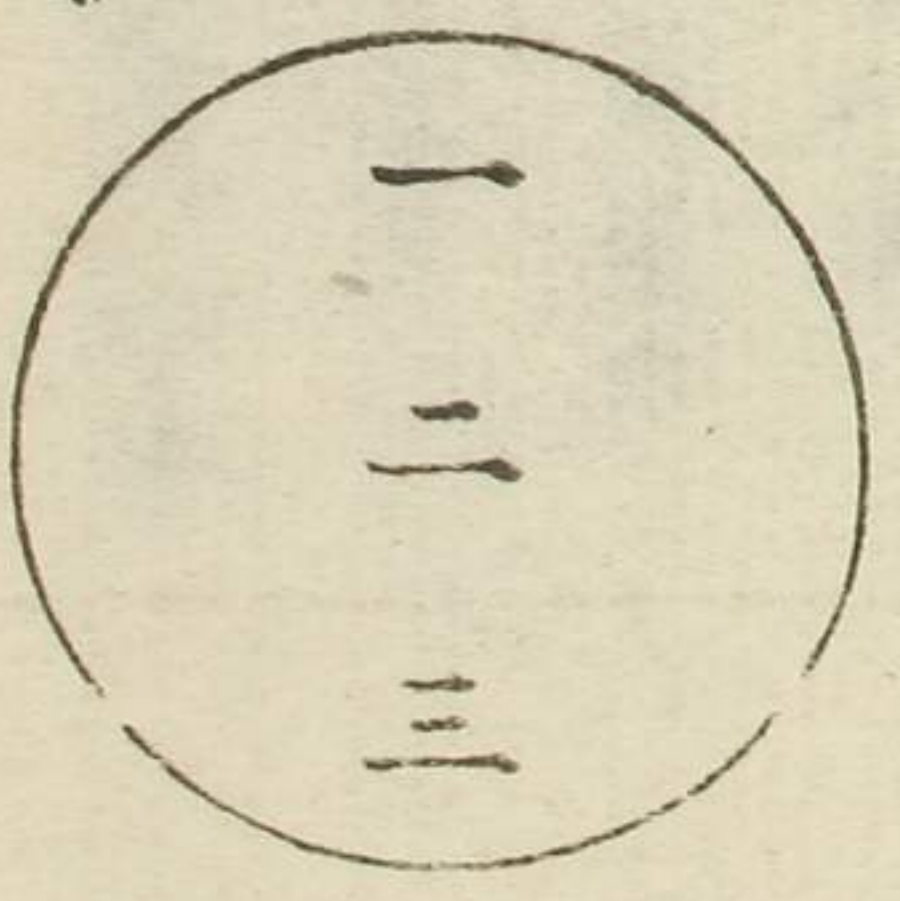
一 中次何ぞ中緒ユイシヨ何テハ濃茶テと包テ用テい

包テ一

一 金輪寺

濃茶テ乃時テ包テ上テニツ

右テハ包テく濃茶テと包テ用テい
包テ一



茶式朝月抄

一炭寸法スミ 爐ロ

長五寸 木口貳寸二分

胴炭ドムスミ 同二寸三分 同三寸五分

輪炭ワ 同貳寸五分 四方刻カケても用也

四方炭 同貳寸五分 四方刻カケても用也

管炭クダ 同五寸 木口七八分 同八九分より一寸五六分まで 大小取ト変用

一風爐炭寸法

胴炭 長四寸 木口一寸五六分

輪炭 同一寸五分 同七八分

球打炭 同二寸 同

管炭 同四寸 同七八分

一糸巾寸法

大布巾フキン 長五尺五分 長五寸

小同 長五尺 同五寸

但シ 大は方カタ好ヨクく不用 小は方專カタし用也

一茶釜チヤセン

真マシ 數種 五十七

草ササ アラ種 三十二

大正三十九年十一月

ギヤウ
行 (片一トキ上蓋兼として箱に去付らる方より)
中アラ植 四十六

右乃内竹を中用として内敷植、ダイレンモク 基天目竹ルイ 用由深竹白竹を用紫竹を不用

○白竹ハ天然さくひく用不中組一箇池宗好基子
傳授し各白竹ハ不用方よりし極キハナ

一 帛寸法 五月十九日二十一日なり

一 三色

紫 考用
黄唐系 老人などほくひては
○シヨハ深さく天然好
○懐中帛はさうさく帛と
勘考可有
○味味赤好乃シヨハ織は中
は系用也

紅 年十五以下五十以上

一 シヨハ帛ハ何色よて。不苦茶は湯ハ不用

一 筒茶碗 塩筒 ふきやう中とふきまをさうとふき茶碗持あが
トヨ色

若さとのハ不用五十才以上のハよりさふ

茶碗ハ底よりふき脇ワキをふく人も入ふくさなり
たる茶碗ハ用ひぬがし

一 大蓋鉢

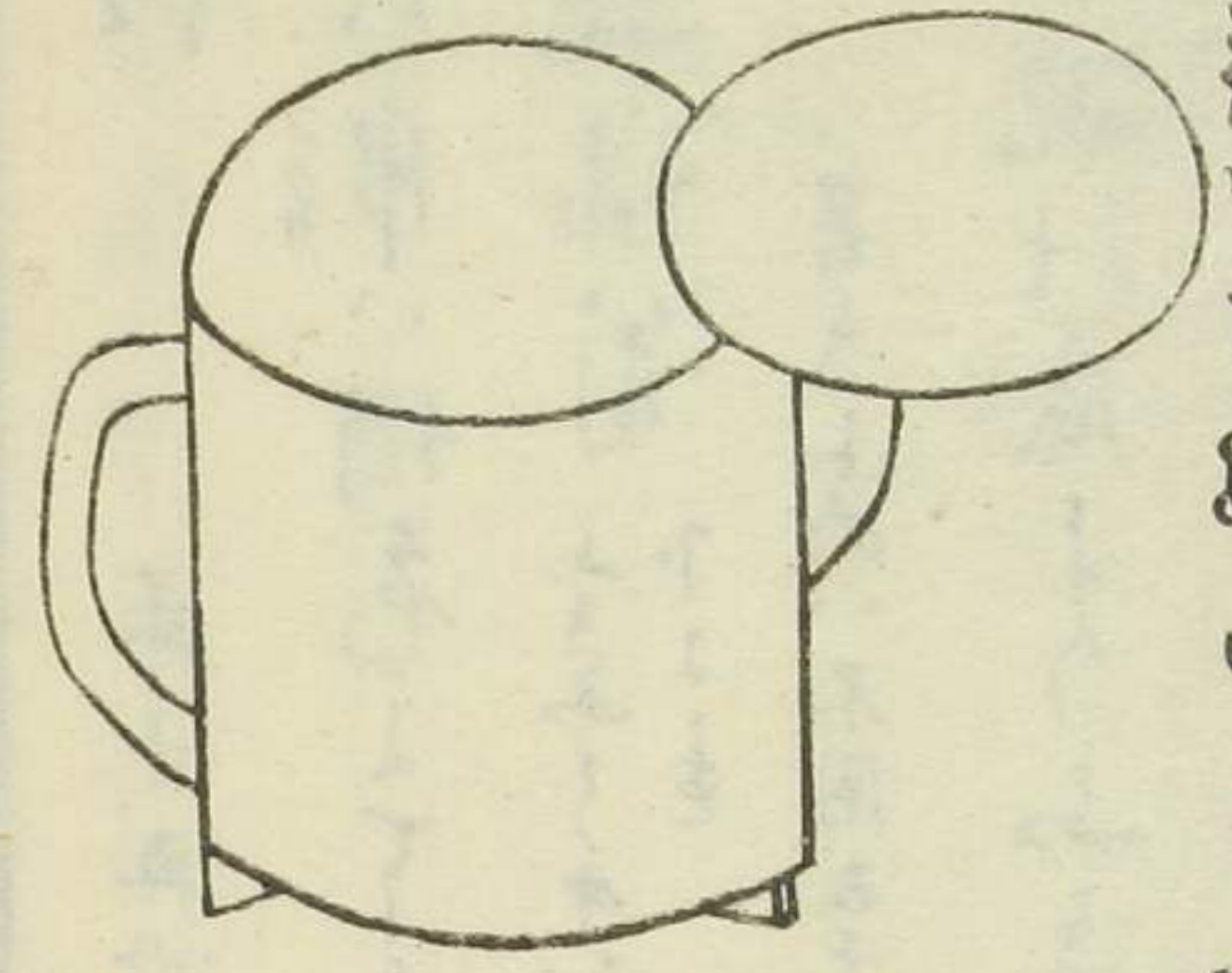
向切四角中何さ大蓋扱有風燈ハ大蓋鉢
不用故扱ハ併大さく扱てし

大正三十九年十一月

一 茶罐片に仕事

薄葉乃言水指^{サシ}の用也

- 行は、如圖の如く上へて置くに、蓋の方を右
- 茶罐の常仕立に、蓋を取て、瞬^{ツキ}に扱ふ



一 瓶^{ビン}水指^{ミヅサシ}

持^{モチ}やう常仕水指^{サシ}乃通^{トウ}も、必^{カナラ}持出^{モチデ}

○ 蓋取^{フタ}扱^{アツカヒ}やう三毛

○ 釜付の方^{カマツケノカタ}は蓋^{フタ}向^{ムカ}より茶^{チヤ}少^シ押^{オシ}出^デ、常^{トコ}の扱^{アツカヒ}

扱^{アツカヒ}五^{イヒ}扱^{アツカヒ}

○ 右^{ミドリ}乃^ノ扱^{アツカヒ}と取^{トル}廻^{マヅル}し、そ^ノ扱^{アツカヒ}の^ノ扱^{アツカヒ}

○ 右^{ミドリ}扱^{アツカヒ}と取^{トル}廻^{マヅル}さば、直^{スジ}に扱^{アツカヒ}せ

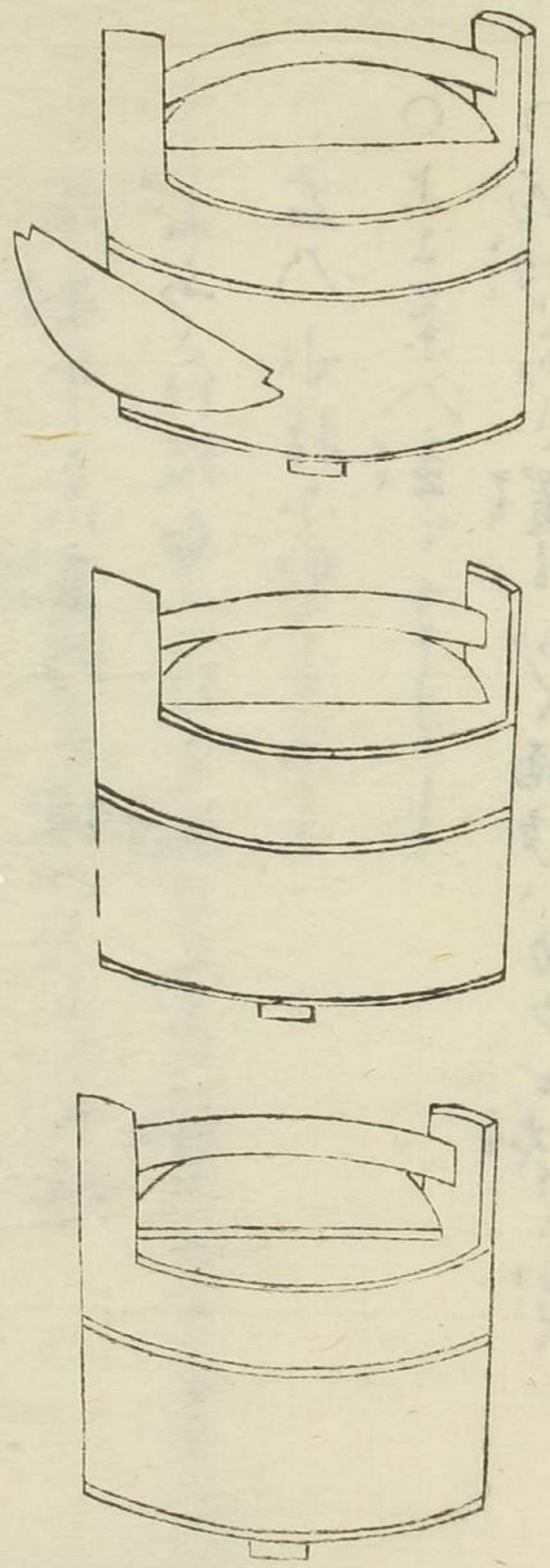
一 大^{オホ}口^{クチ}

常^{トコ}薄^{ウス}葉^{ハヤ}仕^シ言^{コト}水指^{ミヅサシ}の用

一 眞マコトの桶

- 口の釜の方へしを垂カサふさひ半マコトはぶとく取リて掛ケる
 - 但し蓋フタ乃ハよク飾カサを付ケて置キ水ミヅ指サシ大オホ蓋フタ乃ハ通ス
- と横ヨコと右ミダリ乃ハもトもト持モチ出デるハ一ヒトツツは方カタ前マヘ
 たる風フウ炉ロは言コト足タラシ乃ハ差シ別ベツふハ一ヒトツツ風フウ爐ロは足タラシとト一ヒトツツあれ
 とも暫シラく社ヤ内ウチ乃ハ事コト左サ苦クくクくクべ
- 蓋フタとく扱アツひヒやヤ一ヒト色イロ
 - 親オヤゆユびビと上ウヘと引ヒキ出デし直スガまマたタ掛ケる
 - 右ミダリ乃ハぶブと取トりリ垂カサまマおオ上ウヘ乃ハのノ事コト

○ 右ミダリはぶブと取トりリ垂カサまマ返カエし向ムカひヒ乃ハのノ事コト



此コノ乃ハ桶バケ四シ方カタ棚ダ竹タケ其コノ蓋フタ子コおオいイふフ用ヨウとて原ゲン更ゲ下カりリ初ハジめ
 柄ハシ拍ヒはハくク事コト何ナニりリココウウとトもモカカ希カ蓋フタおオ上ウヘ拍ヒ乃ハ方カタ子コ蓋フタ
 先マへヘとトもモ事コト

割蓋 老松 大海 金輪寺

平束 茶合 川太郎 点の掛い分濃茶に不用力
よりきき極

右四品濃茶に用也川太郎は天津袋へ入る
割蓋扱老松は通大海はひや前記

○平水帛持添フシヤ子小清くく

○茶籠チカゴ古来有といふ千家社好うは

一茶のむ記や

束とよハ 薄茶器うハ

上巻尾

